

高岡遺跡

—高岡3・4号古墳—

飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1990年3月

長野県飯田市建設部土木課
長野県飯田市教育委員会

高岡遺跡

—高岡3・4号古墳—

飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1990年3月

長野県飯田市建設部土木課
長野県飯田市教育委員会

序

当飯伊地域における職業教育の一端を担い、地域の工業振興の原点ともいえる人材を供給している長野県飯田工業高等学校は、長く市街地西部の上飯田地区にあったが、その建物は老朽化し、敷地面積も狭く、教育施設としては、不十分といわざるを得ない状況でした。

このたび、市内座光寺地区に同校が移転新築され、平成元年10月には新校舎での授業が開始されています。

飯田市では、同校の開校に合わせ周辺環境整備を計ると同時に、地域住民の強い要望に答えることもあり、市道の改装工事を実施することになりました。

たまたま、その地が長野県史跡高岡1号古墳にも近く、市内でも有数な古墳群の所在する一帯にあたるため、当教育委員会では、道路建設予定地について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を行ない後世に伝えるため記録保存を計ることになったわけです。

その結果は、当初の予想どおり、消滅してしまった古墳の周囲をめぐる溝など貴重な資料が発見されました。そのいずれもが、解明途上にあるといえる当地域の古墳文化研究や地域史解明に多大な成果を挙げ得たと考えています。

そうした貴重な発見が、道路建設という地域的な課題の中で消失することは断腸の思いではありますが、その道路完成により、飯田工業高等学校のより一層の発展と地域振興に大きく寄与することを思い、本書に記して後世に長く伝えることを次善の策として納得しているところです。

最後に、本調査及び本書作成にあたり、多大なご援助・ご協力・ご理解をいただいた関係各位に深く感謝し、衷心よりお礼申し上げます。

1990年3月

飯田市教育委員会
教育長 福島 稔

例 言

1. 本書は、飯田市座光寺古市場地区の市道建設に先立ち実施した高岡遺跡の緊急発掘調査報告である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が飯田市建設部土木課の委託を受けて実施した。
3. 本書の発掘調査に関し、石行遺跡と隣接する地であるが「高岡遺跡」とし発掘調査及び整理作業において遺跡名に略号TKOを用いた。また、古墳については、高岡3号古墳をTKOK3、高岡4号古墳をTKOK4の略号を用いた。
4. 調査実施にあたり、50m四方の大区画、2m四方の小区画に分割して作業を行なった。調査範囲のほぼ中央にある道路センター杭を基準にし、大区画は南側をA区北側をB区とした。小区画は、道路センターを50ラインとし東へ50・51・52～、西へ49・48・47～、それぞれの大区画の南からA・B・C～、小区画の名称はAB53・BD48などとなる。
5. 調査は、平成元年4月25日にトレンチによる試掘調査を実施し、引き続き重機により表土を剥ぎ、調査を実施した。続いて平成元年度末まで整理作業及び報告書の製作を行った。
6. 本報告書の記載は、古墳を優先し、次にほかの遺構を掲載した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書のまとめ・調査の経過等は、小林正春が、遺構等の記述は佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行なった。
8. 本書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器の表現として、使用痕及び擦痕は図内及び図外に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1 経過に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	3
II 遺跡の環境	5
1 自然環境	5
2 歴史環境	5
III 調査結果	13
1 遺構と遺物	13
1) 古墳	13
① 高岡3号古墳 ② 高岡4号古墳	
2) 溝址	15
① 溝址1 ② 溝址2 ③ 溝址3 ④ 溝址4	
3) 土坑	17
① 土坑1 ② 土坑2 ③ 土坑3 ④ 土坑4	
⑤ 土坑5 ⑥ 土坑6 ⑦ 土坑7 ⑧ 土坑8	
⑨ 土坑9 ⑩ 土坑10 ⑪ 土坑11	
4) その他の遺構	22
① 時期不明の穴	
5) 遺構外遺物	23
IV まとめ	24

挿 図 目 次

挿図1	高岡遺跡位置及び周辺遺跡図	4
挿図2	調査位置及び周辺図	8
挿図3	高岡遺跡遺構全体図	9・10
挿図4	高岡3号古墳	11・12
挿図5	高岡3号古墳及び西側用地境土層図	14
挿図6	TKO 溝址1・2・3	16
挿図7	TKO 溝址4	17
挿図8	TKO 土坑1・2・3・4・5、BA, BB53穴	19
挿図9	TKO 土坑6・7・8・9・10・11	21

付 図 目 次

付図1	高岡4号古墳	
-----	--------	--

図 版 目 次

第1図	高岡3号・4号古墳出土土器	28
第2図	高岡4号古墳、TKO土坑2出土土器	29
第3図	TKO土坑2、遺構外出土土器、石器	30
第4図	TKO遺構外出土石器	31
第5図	TKO遺構外出土石器	32
第6図	高岡3号古墳、TKO土坑2・6、遺構外出土鉄製品	33

写真図版目次

図版 1	調査地調査前東から、同南から	36
図版 2	高岡 3 号古墳西から、同北から	37
図版 3	高岡 3 号古墳葺石検出状態、同北側上部、同下部	38
図版 4	高岡 3 号古墳北側周溝外壁石出土状態、同北側周溝土層断面、同南側周溝土層断面、同周溝内出土刀子	39
図版 5	高岡 4 号古墳南東から、同東から	40
図版 6	高岡 4 号古墳葺石	41
図版 7	溝址 2・3、土坑 11、溝址 4、土坑 6・7・8・9	42
図版 8	土坑 2、同遺物出土状態、同須恵器甕出土状態	43
図版 9	土坑 2 須恵器蓋・坏出土状態、同須恵器平瓶出土状態	44
図版 10	土坑 6、同遺物出土状態、同土層断面	45
図版 11	土坑 4、土坑 7、土坑 8	46
図版 12	A 区北側全景、A 区南側トレンチ調査部分	47
図版 13	高岡 3 号古墳周溝出土須恵器甕、同須恵器甕・蓋、同刀子	48
図版 14	高岡 4 号古墳周溝出土埴輪	49
図版 15	高岡 4 号古墳周溝出土埴輪、同土師器坏	50
図版 16	土坑 2 出土土師器坏、同須恵器壺・蓋	51
図版 17	土坑 2 出土須恵器蓋	52
図版 18	土坑 2 出土須恵器坏、同須恵器平瓶、土坑 6 出土骨、同漆質、同小刀	53
図版 19	遺構外出土縄文土器、同石器	54
図版 20	遺構外出土石器	55
図版 21	遺構外出土石器	56
図版 22	遺構外出土須恵器・磁器・常滑、同鉄製品・煙管・飾金具	57
図版 23	重機による表土剥ぎ、遺構検出作業、遺構掘り下げ作業	58
図版 24	遺構掘り下げ作業、清掃作業、測量作業	59

経 過

1 調査に至るまで

長く上飯田地区に所在し、老朽化した長野県飯田工業高等学校が、座光寺高岡地区に新築移転され、平成元年10月に閉校した。その正門部分の整備に合わせ、進入道路も新たに建設されることとなった。

一方、座光寺地区は、段丘の上段部と下段部を結ぶ道路が旧態のまま、現在の自動車全盛の時代の中で、早期に拡幅すべく強い地域要望があった。

そのような状況の中で、飯田市建設部土木課により、万才地区を通過し上段と下段を結ぶ市道の拡幅整備計画が具体的に立案され、第1期の工事として、旧国道153号に取り付く部分から飯田工業高校入口部辺について平成元年度に工事実施することとなった。

平成元年に至り工事計画が具体化する中で建設部土木課から飯田市教育委員会に埋蔵文化財の保護について協議依頼があった。それにより、同年3月14日長野県教育委員会文化課、市建設部土木課、市教委社会教育課の担当職員がそれぞれ立合って現地において、その保護策について検討、協議を行なった。

その結果、飯田工業高校の開校に合わせて一部共用を開始することが確認され、同時に当該地が、古墳2基を含む埋蔵地にあたることも確認され、平成2年度の早期に飯田市教育委員会により発掘調査を実施し、記録保存を計ることとなった。

なお、第2期工区内においても、1期区間同様に埋蔵文化財の包蔵地が所在することも確認され、順次建設計画が具体化する中で、市建設部土木課と飯田市教育委員会とで協議する中で対応することとなった。

2 調査の経過

平成元年度に至り、市建設部と市教育委員会では、前年度の協議結果を踏まえ、教育委員会の受諾事業として、記録保存のための発掘調査を平成元年4月25日から着手した。

調査は、当該地に所在するとされる古墳の位置を把握すべくトレンチを設定して調査した。その結果、2基の古墳は調査範囲内の北西方に連続して存在することを確認した。また、それ以外の部分については、縄文期の遺構等が所存するか否かの確認作業を行なった。

トレンチの状況を確認したあと、当面古墳部分の表土を重機により撤去し、古墳の周溝検出作業を行なった。

周溝範囲を検出した後、まず、高岡4号古墳の周溝埋土を掘り下げ、墳丘面の葺石の検出をす

るとともに、周溝内の埴輪等の遺物を取り上げ、写真撮影、測量作業等を行なった。

ひき続き、高岡3号古墳の周溝を掘り下げ、高岡4号墳同様の諸作業を行なった。なお、周溝内に土坑が確認され、これについても諸作業を行なった。

3号墳の調査終了後、3号墳東方に調査の進行上盛り上げた廃土及びその部分の表土を、重機により除去し、調査終了部分にあたる3号墳の上に盛り上げた。

表土除去後、遺構の検出作業も行ない、溝址及び土坑の存在を確認し、それらの諸調査を実施して、現地での作業を5月31日すべて完了した。

その後、出土遺物、現地作成の図面類を飯田市考古資料館に移し、遺物の復元をはじめとする遺物の整理作業、図面類の整理作業等を行ない、本報告書の作成を平成2年3月までに行なった。

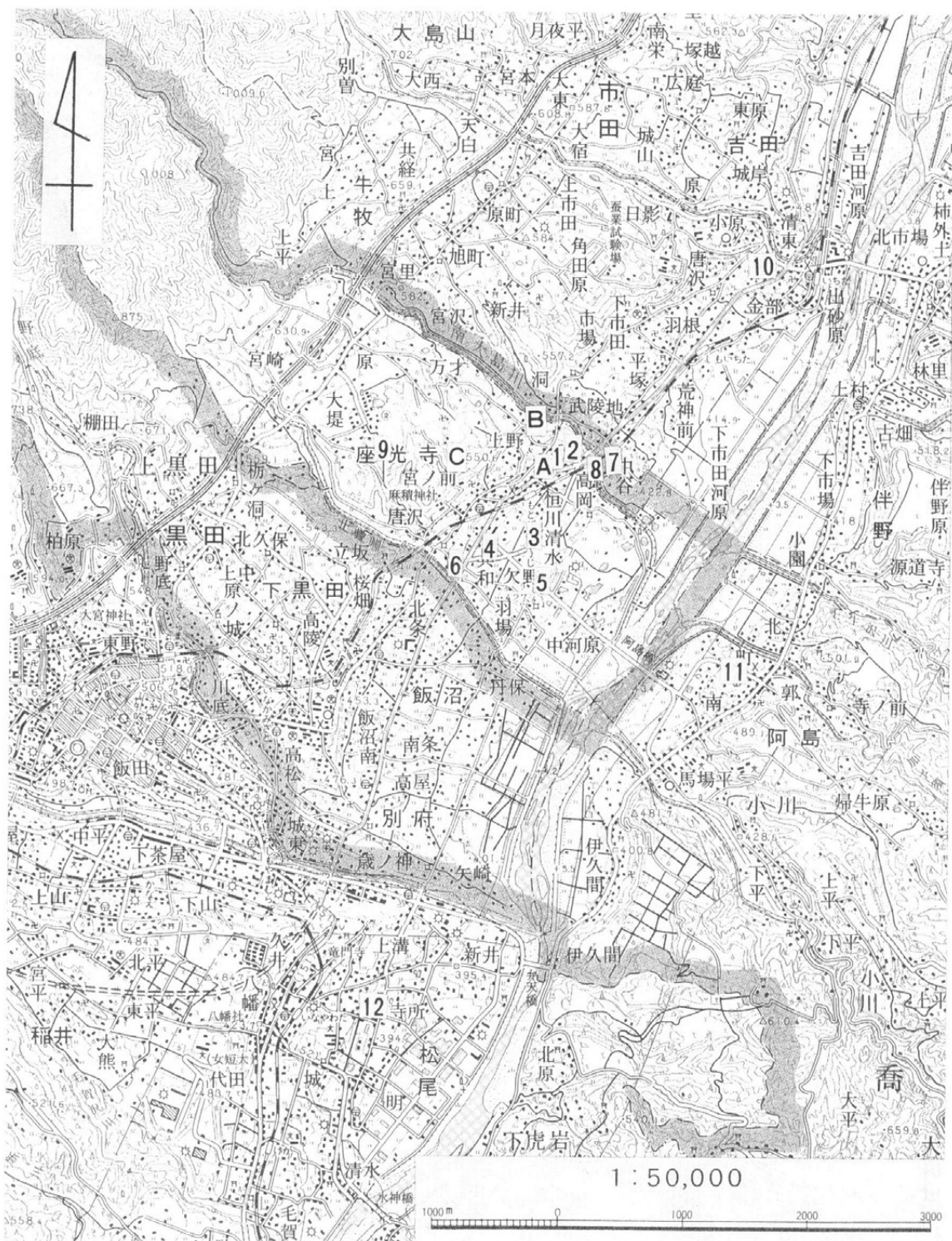
3 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林正春
調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之 功力司
作業員 向田一雄 今村春一 松下真幸 福沢トシ子 坂下やすゑ 正木実重子
木下喜代恵 吉川正実 北村重実 松下直市 高橋収二郎
整理作業員 池田幸子 小平不二子 吉川紀美子 榑原勝子 吉川悦子 木下玲子
宮内真理子 唐沢古千代 丹羽由美 松本恭子 川上みはる 田中恵子
林勢紀子 福沢育子 吉沢まつ美 森信子 南井規子 牧内とし子 牧内八代
福沢幸子 木下恒子

(2) 事務局

事務局長 竹村隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）
事務局長 中井洋一（飯田市教育委員会社会教育課文化係長）
小林正春（ “ ” 文化係）
吉川 豊（ “ ” “ ” ）
馬場保之（ “ ” “ ” ）
土屋敏美（ “ ” “ ” ）
功力 司（ “ ” “ ” ）



1. 高岡遺跡調査地点 2. 石行遺跡 3. 恒川遺跡群 4. 流田遺跡 5. 欠野遺跡
 6. 正泉寺遺跡 7. 高森町新井原遺跡 8. 新井原遺跡 9. 座光寺原・中島遺跡 10. 北原遺跡
 11. 阿島遺跡 12. 寺所遺跡 A高岡1号古墳 B畦地1号古墳 C北本城古墳

挿図1 高岡遺跡調査位置及び周辺遺跡位置図

II 遺跡の環境

1 自然環境

高岡遺跡は飯田市座光寺高岡地籍に所在する。

飯田市座光寺は、市街地の中心から約5 km北方にあり、南を下伊那郡上郷町、北を同高森町に挟まれている。座光寺地区は東を天竜川、西を中央アルプス、南を土曾川、北を南大島川により区切られた、旧座光寺村である。

地区内を南北方向に走る断層崖により段丘が形成され、地区のほぼ中央を横断する比高差約10 mの段丘崖で、俗にいう上段、下段に分かれ、この段丘を小河川が浸食して小さな谷間を作っている。それにより、各所で微地形の変化が認められ、扇状地、段丘面が複雑に連続する状況がある。

本遺跡は旧座光寺村東北部の低地となる。天竜川第三段丘の暖傾斜地に立地する高岡古墳群を含めた一帯で、南大島川により北東を浸食された小段丘の先端に近い。調査地点は標高444.5～439mで、高岡一号古墳から北へ100m、石行遺跡の南端に続く傾斜地で、南東は新井原遺跡に続く。

調査地点を含む一帯は、南大島川が下位段丘面部に流出した位置にあり、それにより扇状地の扇頂部付近に立地するため、地形形成の地山はもちろん、縄文時代以降の堆積土中にも多量の石礫が認められる。

2 歴史環境

埋蔵文化財は縄文時代から近世まであり、一般的には、地中にあるため、その所在や具体的な内容は不明であり、発掘調査により具体的な内容が示されるが、例外として、地表で確認が可能なものもある。地表に見える構造物としては古墳と城跡の2者が代表する。

座光寺地区は古くから古墳の多いこと、土器、石器の散布の多いことで知られており、家宝として鏡、玉などを所蔵している人たちも多い。

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余り、古墳の現存するものは10余りであるが、下伊那史には古墳総数66基の記録があり、その後、8基の古墳が新たに確認され、総数74基があったわけである。

地区内にある遺跡の時期別分布は、上段地帯に縄文、弥生時代の遺跡があり、山寄りに縄文時代の遺跡の濃度が増している。中央の段丘崖上に古墳、中世山城が位置し、下段には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

発掘調査の最初は、大正11年11月に現在の東日本鉄道飯田線にかかって調査された大塚（新井原12号古墳）である。この頃鳥居龍蔵氏の遺物調査が行なわれている。大正12年には畦地1号古墳石室が座光寺小学校職員と高等科生徒によって、清掃調査され、銀製の「垂飾付鎖式耳飾り」が発見されている。その後昭和30年代まで記録は無く破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37（1962）年には前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事中採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期後半の標識「座光寺原式」が設定されている。

その後いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎、大門原など5遺跡が調査された。

昭和50（1975）年には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡が座光寺考古学研究会、下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代終末期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51（1975）年度からR153座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果恒川遺跡群は多期にわたる遺跡の密集地であり、且つ、重要遺構、遺物の出土があり古代伊那郡の推定「郡衛」の一面として注目されている。恒川遺跡群内に「郡衛」の確認を求めて、昭和57年度から文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、63年度で8年目に入った。まだ確認には至っていないが更に重要性は増している。

以上の地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかを踏まえ、地区内の歴史上の変遷を概述すると次のようである。

座光寺地区内において、最初の人々の足跡は、縄文時代草創期の有舌尖頭器の出土例によるが、さらに古い旧石器時代から人の住んだ可能性が強い。

また、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段、下段の区別なく、地区内のほぼ全域から発見され、伊那谷全体における座光寺の位置からみても、中心的な役割を果していたと判断される。

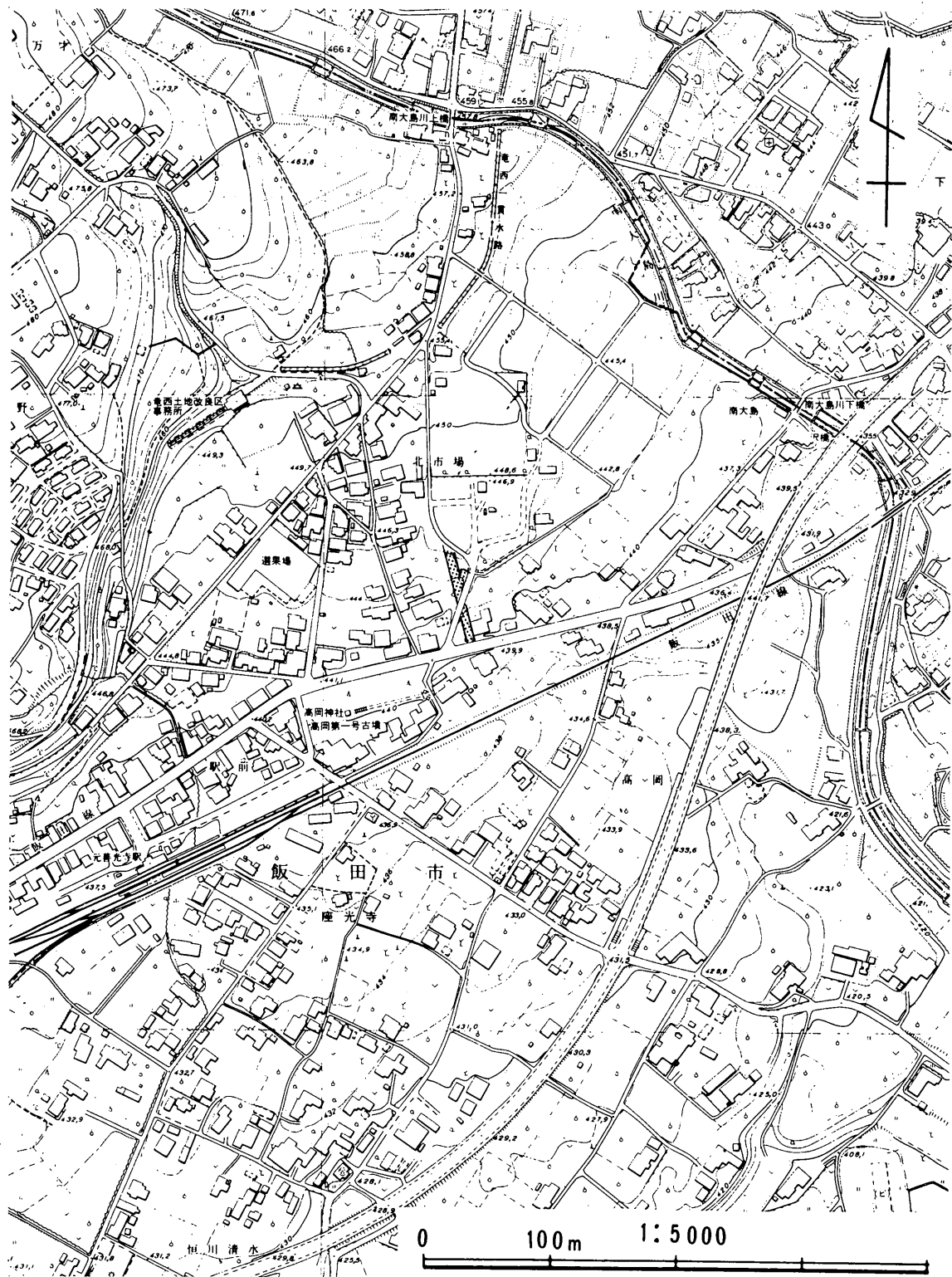
続く、弥生時代においては、地域内における中心的な地であった姿がより明確に捉えられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と3つの標式遺跡が存在し、各期の大集落が展開したことで知られる。

さらに、古墳時代に至ると、先述のとおり、70基を越える古墳が構築された事実があり、その副葬品をはじめとする内容も傑出したものばかりであり、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

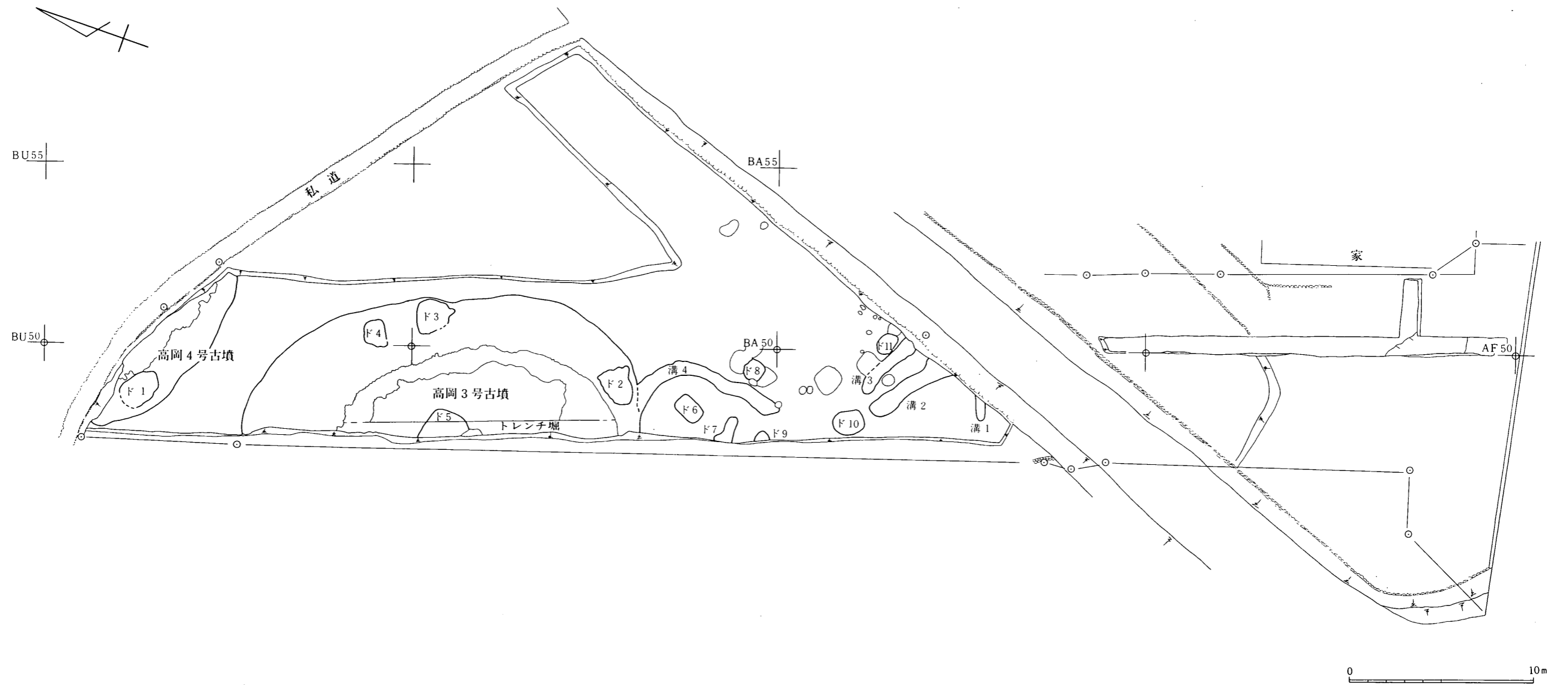
続く、奈良、平安時代については、当地区が、歴史上最も注視されるべき時代といえる。それは、先述恒川遺跡における、古代伊那郡衛址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことはいうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行の上でも欠くことのできない地であったといえる。

次時代の中世以降が、当地区内の歴史資料の希薄な時代であり、南本城、北本城の2城跡があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし、各所で行なわれる埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、他に例のないような優品の出土することが多く、史実に登場しないまでも、当地域において重要な役割を果していた地区と推測される。

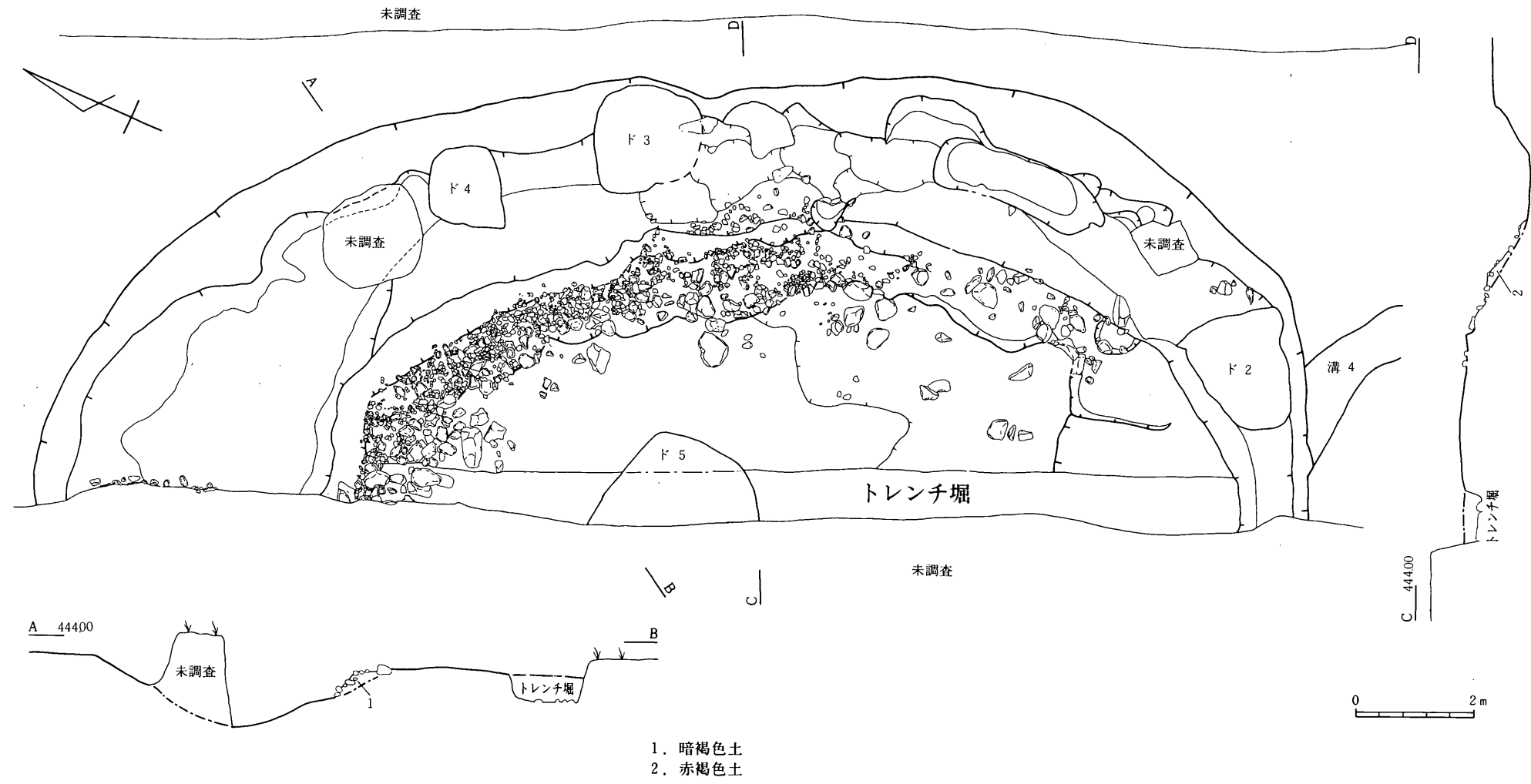
以上のように、各時代それぞれに重要な意味を持つ歴史背影の認められる地区であり、そうした中に本高岡遺跡がある。位置的には、地区内の北端部にあり、そこは、古墳の最密集地区である。今回の調査でも古墳そのものが再確認されたわけで、この地が古墳をはじめ、墓城としての土地利用の姿がより明確に示されたといえる。



挿図2 高岡遺跡調査位置及び周辺図



挿図3 高岡遺跡遺構全体図



挿図4 高岡3号古墳

Ⅲ 調査結果

1 遺構と遺物

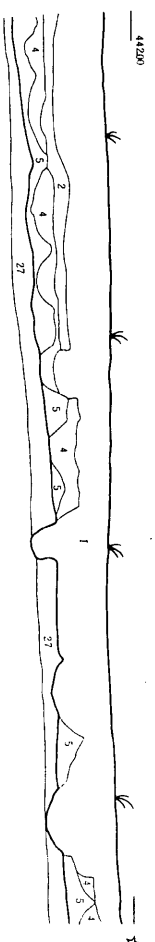
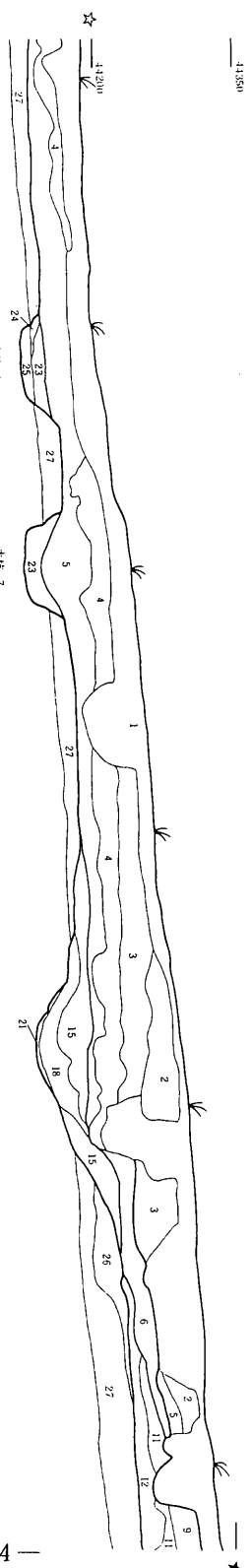
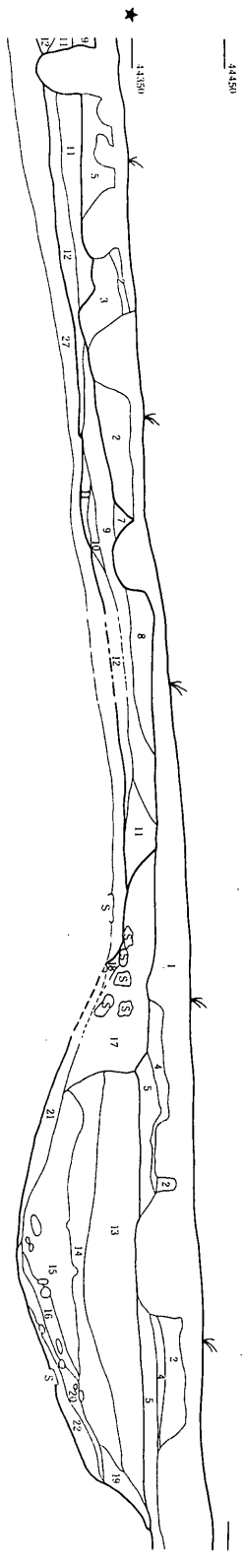
1) 古墳

① 高岡3号古墳(挿図4・5 第1・6図)

調査範囲のほぼ中央部西側に周溝を検出した。南東100mに高岡1号古墳があり、北側4mで高岡4号古墳周溝と近接し、北東30m程に新井原2号古墳がある。北東側の周溝1/3程が調査できたものと考えられ、周溝外側は径約24mを測る。直径16m程の円墳と把握した。下伊那史第二巻によれば無石室の円墳で、明治四十四年に発掘破壊されたとあるが、墳丘のほぼ中央部と思われる位置に径1m程の石が露呈しており、この位置に石室があったものと考えられる。この石は地主の話によると耕作の邪魔になるため掘り起こそうとしたが、地面下はかなり広がって埋まっており、そのままになったそうである。墳丘盛り土は傾斜地に造られているためほとんど削平されている。用地境の土層観察により、墳丘基部面(地山)から60cm程を把握できた部分もあるが、構築時の状況を把握するには至らなかった。確認できた周溝は良好残存部北側で幅5.4mを測った。南端は1.2mと狭いが、これは耕作等により削られているためで本来は3.5m以上あったものと考えられる。深さは検出面からそれぞれ130cmと40cmであるが、底部の比高差は北から南へ1m低くなる。外壁面は内壁面に比べ比較的角度をもって掘り凹められており、中間に稜を持つがこれが当初からものであるかは確認できなかった。また、周溝内に土抗が三基確認された。周溝内の覆土は大きく四層に大別され上部の二層はそれぞれ一気に埋まったと考えられる。葺き石の保存状態はきわめて悪い。上面に葺かれていたと思われる径30cm前後の石はほとんどのものが周溝中に転落もしくは、せりだしている。現位置と思われる石は10cm程のものが多く、地山中の石との把握が困難である。

出土遺物で直接付属すると思われるものは少ない。須恵器甕(第1図1・2)、蓋(3)のほか刀子(第6図1)がある。また、数点の埴輪が出土したが本古墳に所属するものではないと考えられる。ほかに、下伊那史第二巻によると直刀3、須恵器2点が出土しているがその所在は不明である。

時期は、出土遺物などから6世紀に位置づけられる可能性が強いが、今次調査結果から具体的な実証は不可能である。



- 1. 耕土 擾亂
- 2. 黄色砂土混暗褐色土] 旧耕作土
- 3. 黄色砂土混褐色土
- 4. 黄色砂土
- 5. 暗褐色土
- 6. 黑色土混暗褐色土
- 7. 黑色土混暗褐色砂土
- 8. 褐色土
- 9. 暗褐色土混褐色土
- 10. 黑色土混褐色土
- 11. 黑褐色土混褐色土
- 12. 漆黑色土(填瓦構築前生活面)
- 13. 小石混暗褐色土
- 14. 暗褐色土混褐色土
- 15. 漆黑色土
- 16. 礫(崩落瓦石)混褐色土
- 17. 崩壊瓦石混入暗褐色土
- 18. 褐色土混黑色土
- 19. 明褐色砂質土
- 20. 礫(崩落瓦石)混暗褐色土
- 21. 黑色土混明黄色砂土
- 22. 褐色砂質土混明褐色砂土
- 23. 暗褐色土混赤褐色砂土
- 24. 黑色土
- 25. 黄色砂土混赤褐色砂土
- 26. 暗褐色砂質土(溝址 4 覆土)
- 27. 赤褐色砂質土(地山漸移層)

周溝覆土

插图 5 高岡 3 号古墳及び西側用地塚土層図



② 高岡4号古墳（付図1 第1・2図）

本調査では北端に検出されたが、県立工業高校移転に伴う石行遺跡発掘調査で確認されていた古墳で当初から予想されていた遺構である。今回の調査では周溝全体の1/6程を調査した。石行遺跡で調査できた部分との間に私道等があるため3m程未調査の部分があったが、両調査を合わせ高岡4号古墳の全体が把握できた。墳丘は完全に削平されているが、周溝外側の直径は26.5mを測る。今回調査できたのは南端の周溝部分11m程である。周溝の幅は、墳丘側の肩がはっきりしないが2.5m程と思われ、直径20m程の古墳といえる。検出面からの深さは、60cm前後を測る。周溝覆土は礫を含む漆黒色土で、外壁面側に赤褐色の砂質土が認められた。また、周溝内に土坑が一基確認された。葺き石は周溝底部と接する部分には50cm程の大きな石が使われており、上部には15cm前後の石を使用している。保存状態はきわめてよく隙間なく積まれた状態である。

今回の調査での出土遺物は比較的少ない。埴輪（第1図4～6、第2図1～8）には円筒埴輪、朝顔形埴輪がある。ほかに、直接付属するか不明であるが、底部糸切りの土師器坏（9）、須恵器坏（10）がある。

時期は、石行遺跡の調査で出土した遺物等を含め、5世紀末に築造された古墳といえる。

2) 溝 址

① 溝址1（挿図6）

調査範囲のほぼ中央AT48グリットに確認した。東側は現道路のため確認できたのは1m程である。主軸はN74°Eを示す。幅は50cm、深さ15cmを測る。底部は平坦である。覆土は黒色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

時期、性格等は不明である。

② 溝址2（挿図6）

調査範囲のほぼ中央部に、溝址1溝址3と伴に検出した。溝址3とは同方向で、1mの所に隣接する。南東側は現道路があるため未調査となった。主軸はN50°Wを示す。確認した長さは4.5mである。幅は80cm～150cmで、深さは12cmを測る。底部は比較的平坦で確認した部分ではほとんど比高差は認められなかった。覆土は黒色土の一層で、底部にわずかな細かな砂利が認められた。このことから自然の流路とも考えられるが正確な把握はできなかった。

出土遺物は、無い。

時期は、不明である。

③ 溝址 3 (挿図 6)

A V49グリットを中心に溝址 2 と並んで確認され、調査範囲のほぼ中央に位置する。南東側は溝址 1・2 と同様に調査できなかった。長さ 3.8m を確認するに止まった。主軸は $N57^{\circ} W$ を示し、幅 70cm、深さ 25cm を測る。底部は平坦で、比高差もほとんどない。覆土は黒色土の一層である。ほぼ同方向に隣接する溝址 2 があり、なんらかの区画としての性格等も考えられるが、確証は得られなかった。

遺物は、出土しなかった。

時期は、不明である。

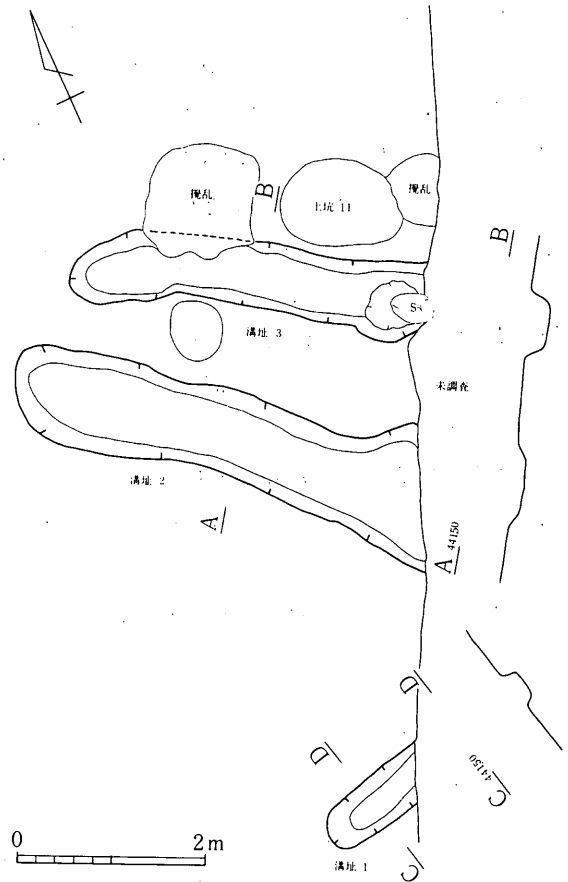
④ 溝址 4 (挿図 4)

高岡 3 号古墳の南側、B C49グリットを中心に確認した。北端で高岡 3 号古墳周溝と切り合っており、用地境の土層観察から本址が切られていると判断される。L字型に検出し、南端は途切れている。確認した長さは南北 5.8

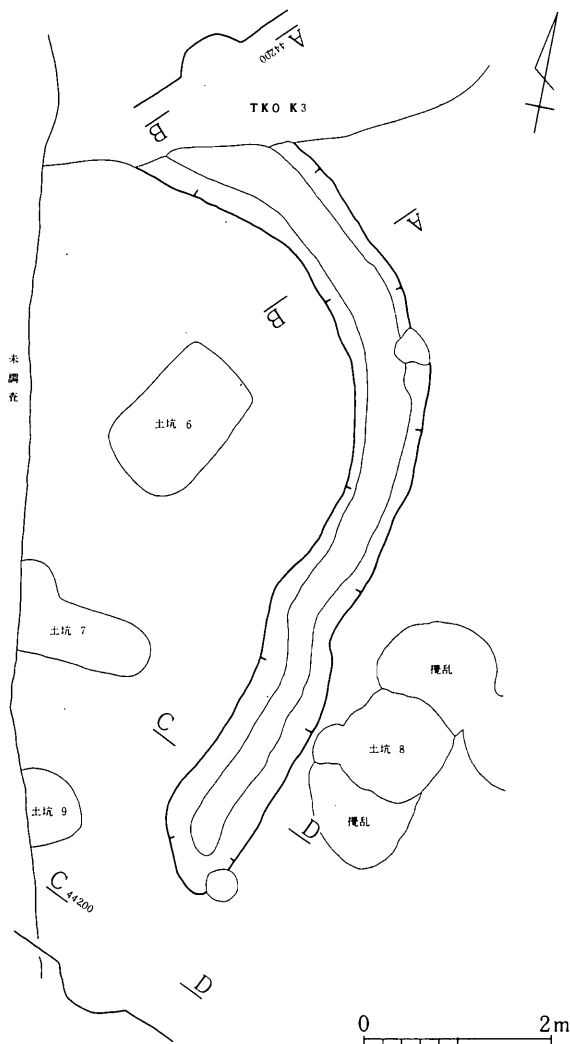
m、東西 3 m を測る。南北方向軸は $N13^{\circ} E$ を示す。検出面での幅は 60cm~100cm、深さ 20cm~30cm を測る。また、地形に添って北から南へ 35cm 低くなる。断面形は U 字形もしくは船底状を呈する。覆土は黒色土の一層で、堅く締まっていた。なんらかの区画、または、方形周溝墓となる可能性があるがこれを裏付ける遺物等の出土はなかった。

出土遺物には、摩滅した土師器片が数点あるのみである。

時期は、不明である。



挿図 6 TKO 溝址 1・2・3



挿図7 TKO 溝址 4

3) 土坑

① 土坑 1 (挿図 8)

高岡 4 号古墳の周溝内に確認した。周溝との新旧関係は把握できなかった。確認できた規模は 2.5×1.5 mで、平面形は隅丸長方形である。長軸方面は $N 53^\circ W$ を示す。深さは周溝底部から24cm、肩から68cmを測る。断面形は船底状を呈している。覆土は周溝の覆土と同じ漆黒土である。この土坑が古墳と同時期に造られたかは確認できなかったが、馬の歯と思われる破片が底部より出土しており、高岡 4 号古墳の被葬者、一族ときわめて関連が深いと考えられる。また、石行遺跡の調査で確認した新井原 2 号古墳周溝内にも同様の土坑(馬坑墓)が検出されている。

遺物は、馬と思われる歯の破片のほかに本址に伴うものは出土していない。

時期は、高岡 4 号古墳と同じ 5 世紀末から 6 世紀後半にかけての時期の範囲に納まると考えられる。

② 土坑 2 (挿図 8 第 2・3・6 図)

高岡 3 号古墳周溝の南端に検出した。規模は 2.1×1.5 mを測る。平面形は周溝の掘り方と重複するためかなり歪んだ台形となるが、本来は隅丸の長方形であったと考えられる。長軸は $N 59^\circ E$ を示す。深さは周溝底部から20cm、肩から62cmを測る。底部は比較的平坦で、断面形は逆台形または皿状となる。覆土は黒色土の一層で、古墳周溝覆土と同じものと考えられる。また、覆土の状態等から、本址は高岡 3 号古墳の最終段階の祭祀に伴う遺構の可能性がある。

遺物は、本遺構の検出状態から、すべてを現位置で確認することはできなかったが、本址を中心とした周溝覆土に、多数の遺物が出土している。古墳が造られた時期と時間差があり、これらの遺物が本土坑に伴うとして問題はない。土師器杯(第 2 図11)、須恵器平瓶(12)、短頸壺(14)

坏(第3図4・5)、蓋(第2図13・第3図1~3)、全体形は不明の鉄製品(第6図3)がある。蓋のうち第2図13は14の短頸壺の蓋と考えられる。

時期は、これら遺物から、7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。

③ 土坑3(挿図8)

高岡3号古墳周溝の掘り上げ完了直前に、周溝の中央やや北よりに土坑4と伴に検出された。周溝の覆土中に掘り方があったかは不明であるが、周溝外壁が掘り取られている。平面形はほぼ正方形で、規模は1.5mを測る。南北側一片の方向軸はN19°Wを示す。確認できた深さは周溝底部から10cm前後、肩から62cmを測る。底部はほぼ平坦である。壁面は西側がほぼ垂直、東側は緩やかに立ち上がっている。底部で認められた覆土は赤褐色土である。

本址に伴う遺物の出土はない。

時期は不明であるが、古墳となんらかの関係が指摘できる。

④ 土坑4(挿図8)

高岡3号古墳周溝の中央やや北に確認した。南側2mに土坑3がある。周溝覆土と本址覆土は同じで、周溝との切り合い関係は把握できなかった。平面形はほぼ正方形で、規模は1.4×1.3mを測る。長軸方向はN71.5°Eを示す。底部は平坦である。確認できた壁面は12cm前後を測り、角度をもって立ち上がっている。西側は更に穴状に15cm程掘り凹められている。底部に認められた覆土は土坑3と同じ赤褐色土である。

遺物には、石器があるが、確実なプランが確認されてからの遺物の出土はなかった。

時期は不明であるが、古墳となんらかの関係があるものと考えられる。

⑤ 土坑5(挿図8)

高岡3号古墳墳頂部に確認した。西側は調査区外となるが1/2程が調査できたと思われる。平面形は東西に長い方形を呈していると考えられる。確認できた規模は2.2×2mを測る。東西の軸方向はN70°Wを示す。深さは10~20cmを測る。確認した壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底部は平坦であるが、西側へ傾斜している。覆土は黒色土である。

遺物には、埴輪、縄文土器、土師器片があるが本址に伴うものかの把握はできなかった。

時期、性格等は不明である。

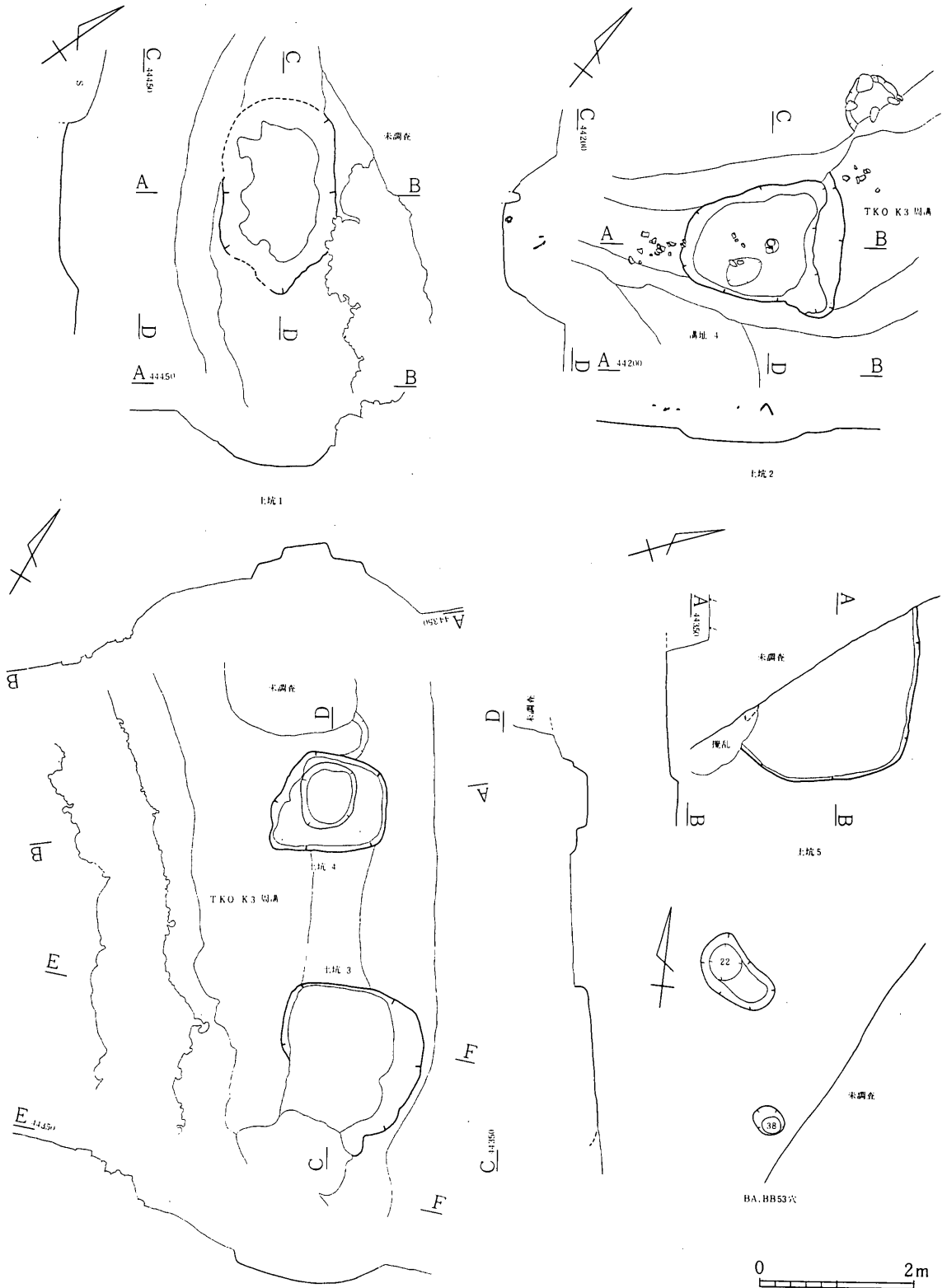


插图 8 TKO 土坑1·2·3·4·5、BA、BB53穴

⑥ 土坑6 (挿図9 第6図)

溝址4の西、BC48グリットに確認した。平面形は長方形である。規模は1.55×1m、深さは20cmを測る。長軸方向はN32°Eを示す。壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。覆土は褐色土と漆黒色土を主体とするもので、北側から人為的に一気に埋められている。また、漆黒色土は溝址4と同じものと考えられ、両者の遺構にはなんらかの関連性が考えられる。本址は、出土遺物等から土葬墓と判断される。

出土遺物には、土師器片、須恵器坏片、小刀(第6図2)があり、ほかに人骨と思われる骨数点と漆、少量の炭がある。

時期は平安時代に位置づけられる。

⑦ 土坑7 (挿図9)

溝址4の南端に土坑9と共に、用地境にかかって検出された。平面形は北西側が吐出し歪んでおり、二つの土坑が切り合っていた可能性がある。確認できた規模は1.5×0.6m(1m)である。長軸方向はN85°Wを示す。断面形は船底状を呈している。覆土は締まった赤褐色の一層である。遺物は、何も出土しなかった。

時期性格は不明である。

⑧ 土坑8 (挿図9)

溝址4の東、BA49グリットに検出した。北と南側は攪乱に切られている。柱穴とも切り合うが新旧関係は確認できなかった。確認した規模は1.1mを測る。ほぼ正方形であるが、本来は南北に長い方形であったと考えられる。深さは90cmを測る。仮の長軸方向はN17°Eを示す。断面形はU字形を呈する。覆土は漆黒色土の一層で、中間に径20cm程の石が2個認められた。

遺物は、出土しなかった。

時期、性格は不明である。

⑨ 土坑9 (挿図9)

BA47グリットに確認した。北側1.5mに土坑7があり、西側は用地外となる。平面形は円形と考えられ、規模は直径80cmを測る。壁面は比較的緩く立ち上がり、底部は平坦である。覆土は土坑7と同じ締まった赤褐色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

時期性格は不明である。

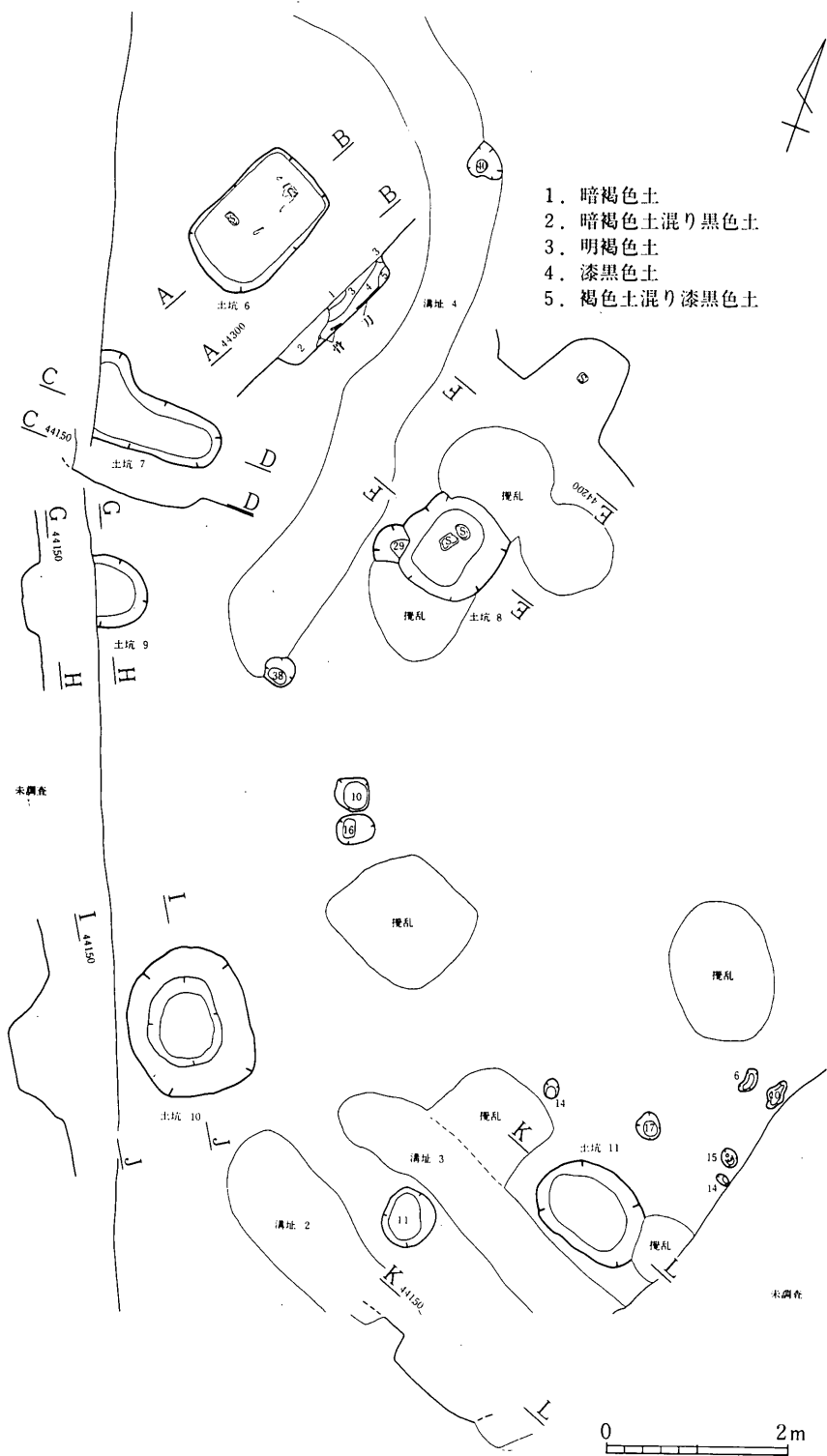


插图9 TKO 土坑6·7·8·9·10·11

⑩ 土坑10 (挿図9)

溝址2・3の西側、1m程に確認された。平面形は方形に近い楕円形で、北西、南東に長い。規模は1.6×1.3mを測る。深さは55cm前後を測り、長軸方向軸はN28°Wを示す。壁面はほぼ中間に稜を持ち、上部は緩やか、下部は比較的角度を持っている。底部は平坦である。覆土は褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は不明である。

⑪ 土坑11 (挿図9)

溝址3の北側に接するように確認した。肩の一部を攪乱に切られている。平面形は北西、南東にやや長い楕円径である。規模は1.3×0.9m、深さは30cmを測る。長軸の方向軸はN63°Wを示す。壁面は角度をもって立ちあがり、底部は比較的平坦である。覆土は黄色土混じり黒色土で、人為的に一気に埋められているものと判断される。

遺物は、何もない。

時期、性格は不明である。

4) その他の遺構

① 時期不明の穴 (挿図3・8)

本遺跡内で確認した穴は14ヶである。規模は径50～15cm、深さは検出面から6～40cmを測るものまでである。径15cm程の小さな穴は、土坑11の北側に検出された。覆土は漆黒色土でみな同じであるが、規則的な並びは把握できない。ほかの穴の覆土は褐色土ないし暗い褐色土で、確認された数が少ないため、これらも規則的な配列等は認められなかった。

いずれもなんらかの柱を立てた穴と考えられるが、具体的な時期、性格は不明である。

穴の遺物には、石器、縄文土器、土師器片などを伴うものがあるが、直接伴うと把握できるものはない。

5) 遺構外遺物 (第3・4・5・6図)

縄文時代

中期土器片(3図6～14)が出土しており、いずれも深鉢となるものである。出土した石器はほとんどのものが縄文時代に位置づくものと考えられ、打製石斧(第4図1～10・第5図1～3)を中心に、横刃型(4・5)、石錐(6)などのほか、黒曜石の剥片がある。

弥生時代

後期土器片(3図15～19)が出土している。いずれも壺の破片と思われるが、どれも摩滅度が激しい。石器として本期に位置づくと思われるものに、半磨製石斧3点(第3図22～24)がある。

古墳時代

本期の遺構外遺物はきわめて少なく、須恵器甕(第3図20・21)の破片のみである。

中世以降

煙管(第6図4)のほか元豊通寶(5)、紹聖元寶(6)、政和通寶(7)、文久永寶(8)などの古銭が出土した。

IV ま と め

高岡3・4号古墳の一部を含む高岡遺跡の一画について、発掘調査を実施したわけであるが、歴史環境で触れたとおり、当該地が、古墳群のごく狭い一部分の調査であり、古墳群の持つ意味のすべてについて言及することは困難かつ不可能であることはいうまでもない。しかし、その一部とはいえ、具体的に現われた事実のいくつかを指摘することは、許されることと考え、それを概述し、本書のまとめとしたい。

高岡3号古墳

下伊那史によれば、『無石室の土塚であった。明治44年に発掘破壊』とされており、また、出土遺物についても直刀3、轡1、須恵器2があったと記されているのみで、詳細は不明であった。位置については、下伊那史記載のとおりであり、出土遺物等の記載内容についても妥当なものと推測される。

しかし、無石室云々の記述については、本文中でも触れたとおり、現地に比較的大きな石が残在しており、これが石室用材であるとすれば、その石の大きさ等から横穴式石室を内部主体とした古墳であったことも一考の余地がある。調査範囲内で具体的に内部主体の把握はできなかったが、その位置と推測される箇所は、畑として残存しており、後世改めて調査がなされれば自ら明らかになるといえる。

また、本墳の築造に関して具体的な年代を知る資料は得られなかったが、隣接する古墳のうち、5世紀から6世紀初頭にかけての諸墳においては埴輪を有するのに反し、本墳においてそれが用いられなかったことも、若干新しい時期に位置づけられる可能性を指摘できる。

さらに周溝内に設けられた、8世紀にまで至ろうかという土坑2の存在も間接的ではあるが、新しい築造時期を推測する材料の一つともいえる。

土坑2に関連して若干の考察を加えると、その検出状況及び出土遺物から、本墳に係る祭祀的なものか、追葬的な意味を持つ土拵墓のいずれかが考えられるが、断定は困難である。しかし、当墳の被葬者と直接のつながりを考えるのは困難としても、何らかの関連のあった人の行為であることを推測することは、あまり無理のないことといえよう。それからすれば、当墳の築造年代は、7世紀代もしくは、6世紀も最末期と考えるのが妥当に思われる。

しかし、周辺の高岡の多くは5世紀後半から6世紀前半のものが主体であり、本墳についても同様の築造年代を与えることもできるかもしれない。そうした時に100数十年を経ての墓前祭祀もしくは、その地を利用したの葬制の存在があったことをいかに理解すべきか新しい問題も生じて来る。

以上、本墳の築造年代等不明な点が多く、古墳群内における位置付けも定まらない中ではある

が、古墳群の盟主ともいえる高岡1号古墳に近接した位置に構築された本墳の内容が具体的に捉えられれば、古墳群全体の内容解明にも一石が投ぜられることを記して本墳の今調査に関するまとめとする。

高岡4号古墳

本墳については、その大半の調査が、先述の飯田工業高校建設に先立つ発掘調査によりなされた経過があり、詳述はそちらに譲るが、今調査においては、円筒埴輪のいくつかが出土したが、いずれも前調査により本墳から出土したもののおよび、隣接する新井原2号古墳出土品と共通し、当古墳群内に特徴的な形態の製作技法の認められるものである。

他地域において、通例みられる刷毛等を活用した顕著な埴輪製作技法を認め難く、むしろ在地方該期の土師器製作技法そのものを埴輪製作にも演用しているかのように思われる。本墳から出土した埴輪は、いずれもそうした地域的特色を有するが、同一古墳群中の他の古墳出土例には、汎日本的な埴輪製作技術に共通するものも出土しており、それが、年代差であるのか、個々の古墳において差異があるのか今後検討すべきことである。

いずれにしても、工業高校用地内調査により出土した多量の埴輪が整理途上のため、具体的な比較検討が不十分な現状では、先述の概要を記すことができるのみである。しかし、これらの古墳出土埴輪について、具体的に整理検討がなされれば、当古墳群そのものの性格等の解明に一步前進があることはいうまでもないところである。

以上、高岡3・4号古墳について、今次調査の結果から若干のまとめを行なったが、先にもそれぞれ触れたとおり、いずれの古墳も周辺に所在する古墳群の一構成単位であり、個々の検討と群としての総体的判断の中で考究して行くべきものであることはいうまでもない。

高岡1号墳を盟主として一帯に分布する、高岡・新井原の古墳群は30数基から構成されている。そのほとんどが、消滅し、原形を保って今に伝えられているものは、ごくわずかであり、消滅してしまった古墳のほとんどが実体不明の状況ではあるが、最近の発掘調査によれば、例外なく周溝は残存し、その内より古墳内容を推し測る資料の出土があり、新しい事実を積み重ねることができる。

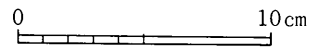
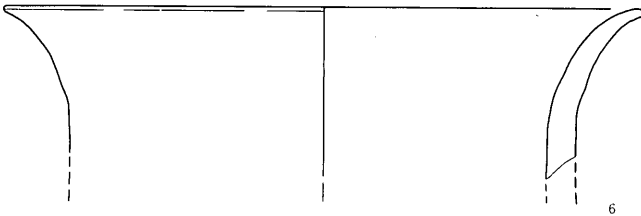
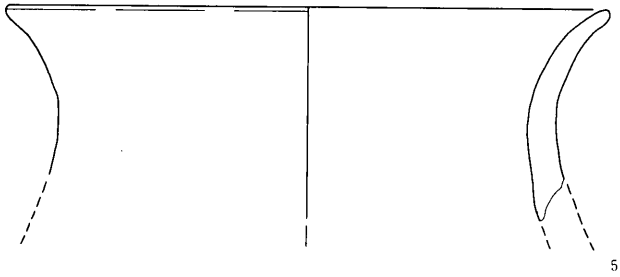
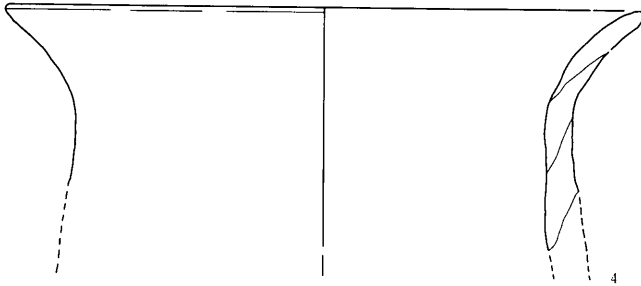
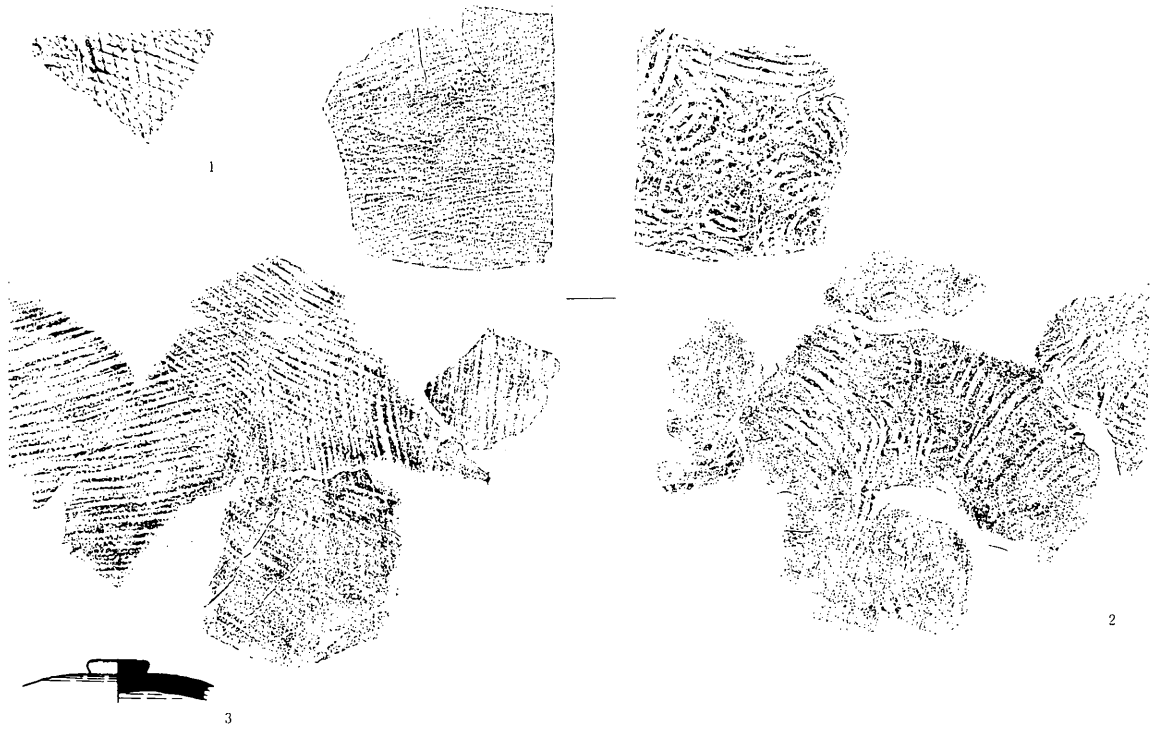
今後、消滅してしまった古墳についても、諸状況の中で確実に発掘調査することなどの対応を成し、埋もれてしまった事実の再確認をし個々の古墳について内容を具体的に整理することにより、古墳群そのものの持つ本来の意味がより具体的に示されるといえる。

一方、ごくわずかに残存した古墳は、消滅してしまった古墳の姿をも代弁する意味を含め、地域に残された貴重な文化遺産として、後世に伝える中で、諸種の考究を計り、地域研究等に活用することが、文化財そのものが我々の生活の中に生きづくものといえる。

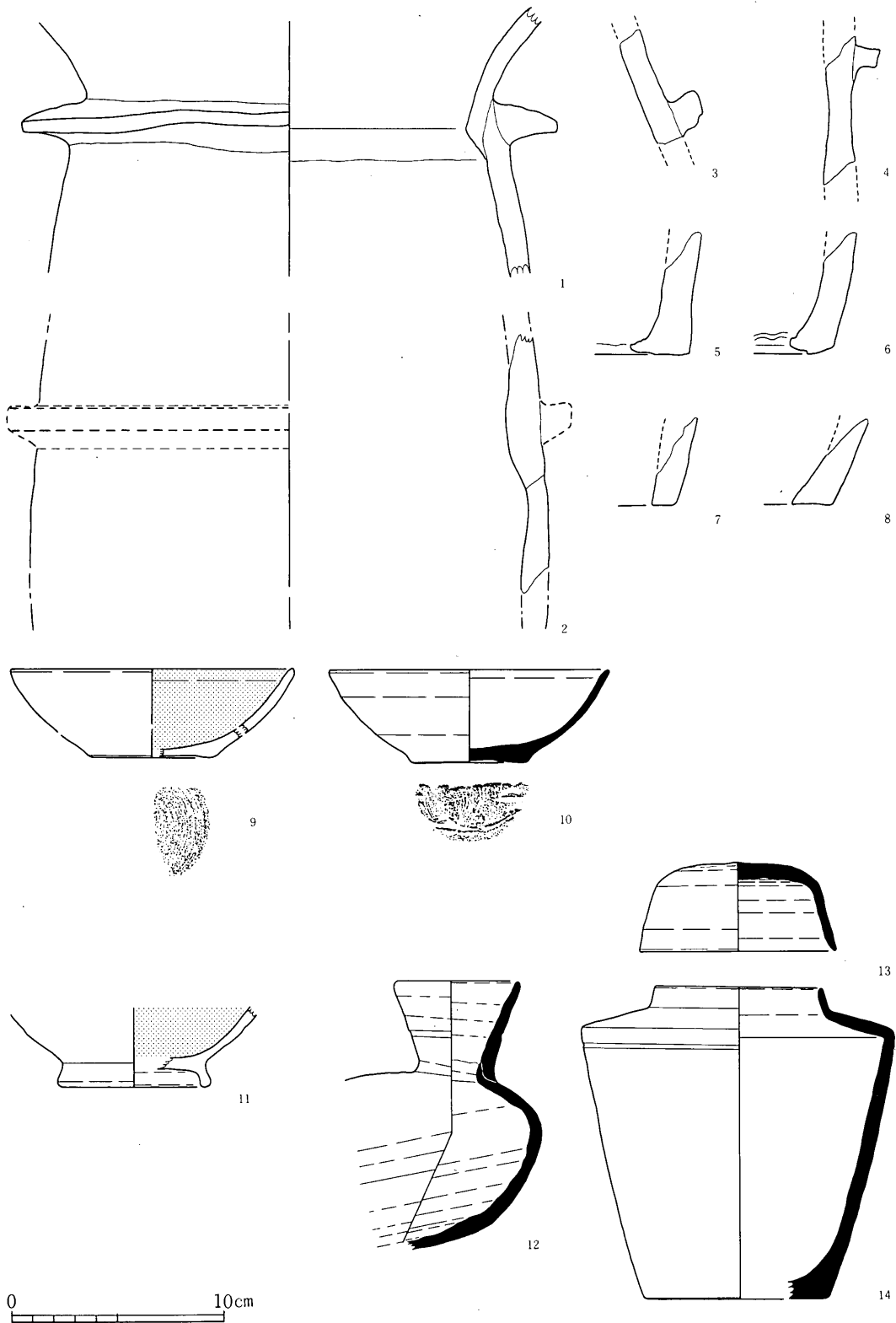
引用参考文献

- 市村威人 1955「下伊那史」第2巻 下伊那誌編纂会
市村威人 1955「下伊那史」第3巻 下伊那誌編纂会
飯田市教育委員会 1986「恒川遺跡群」
松島信幸 1966「伊那谷の段丘」 下伊那地質誌調査資料No.2
米田明訓 1980「南信天竜川沿岸における縄文中期後半の土器編年」 甲斐考古17-1
森浩一 1978「大化薄葬令の馬の殉殺について」 吉川弘文館刊

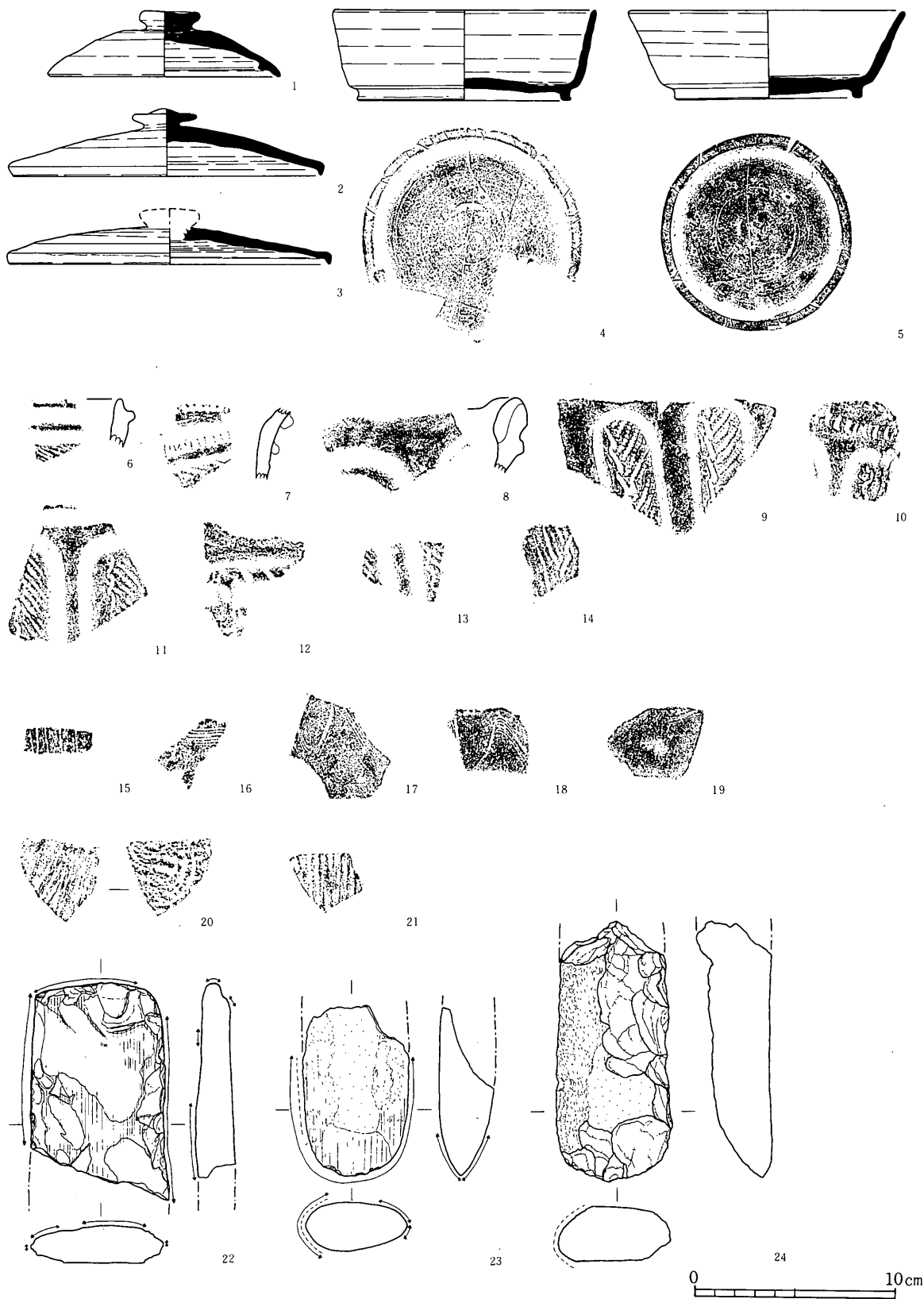
図 版



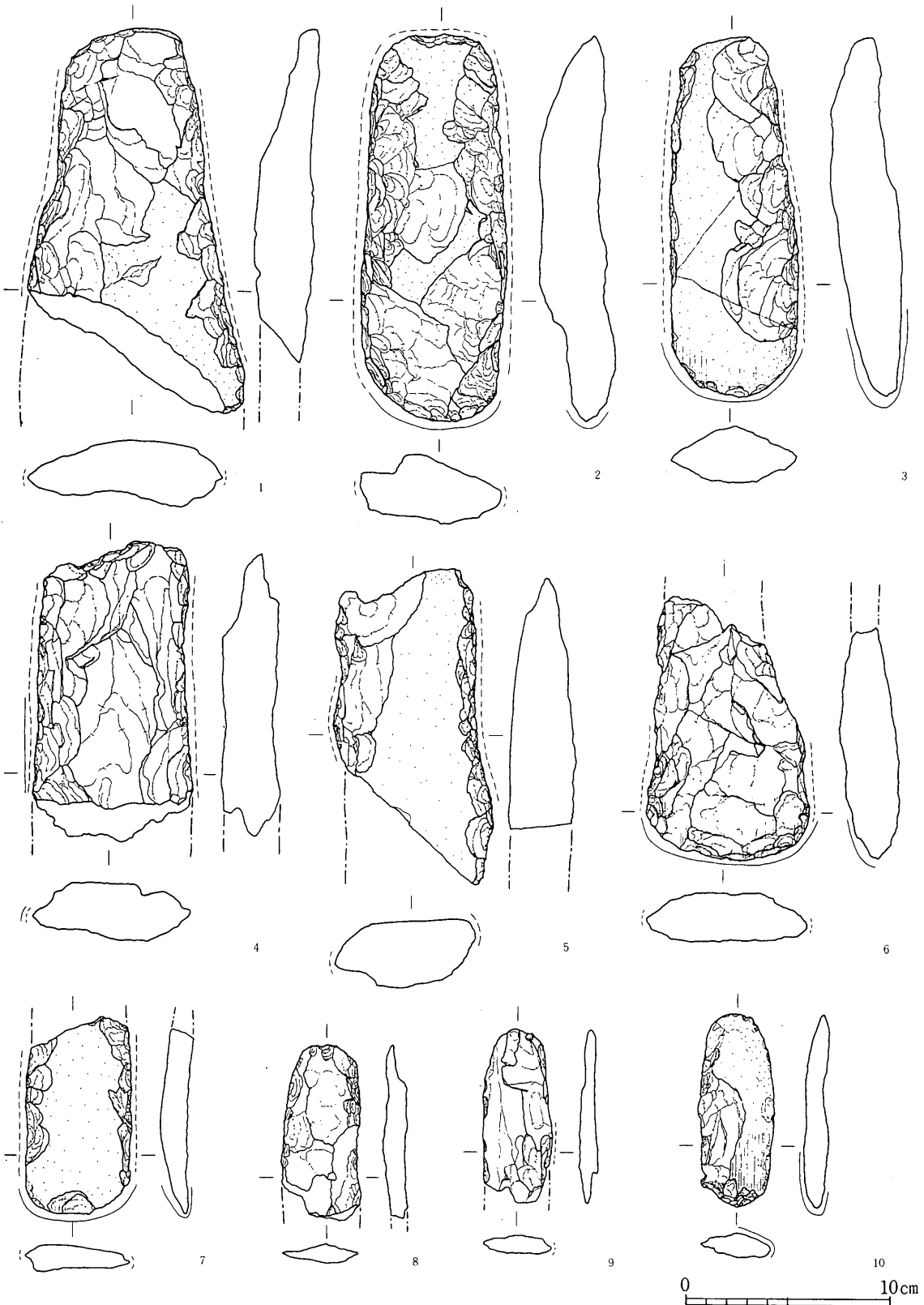
第1図 高岡3号・4号古墳出土土器



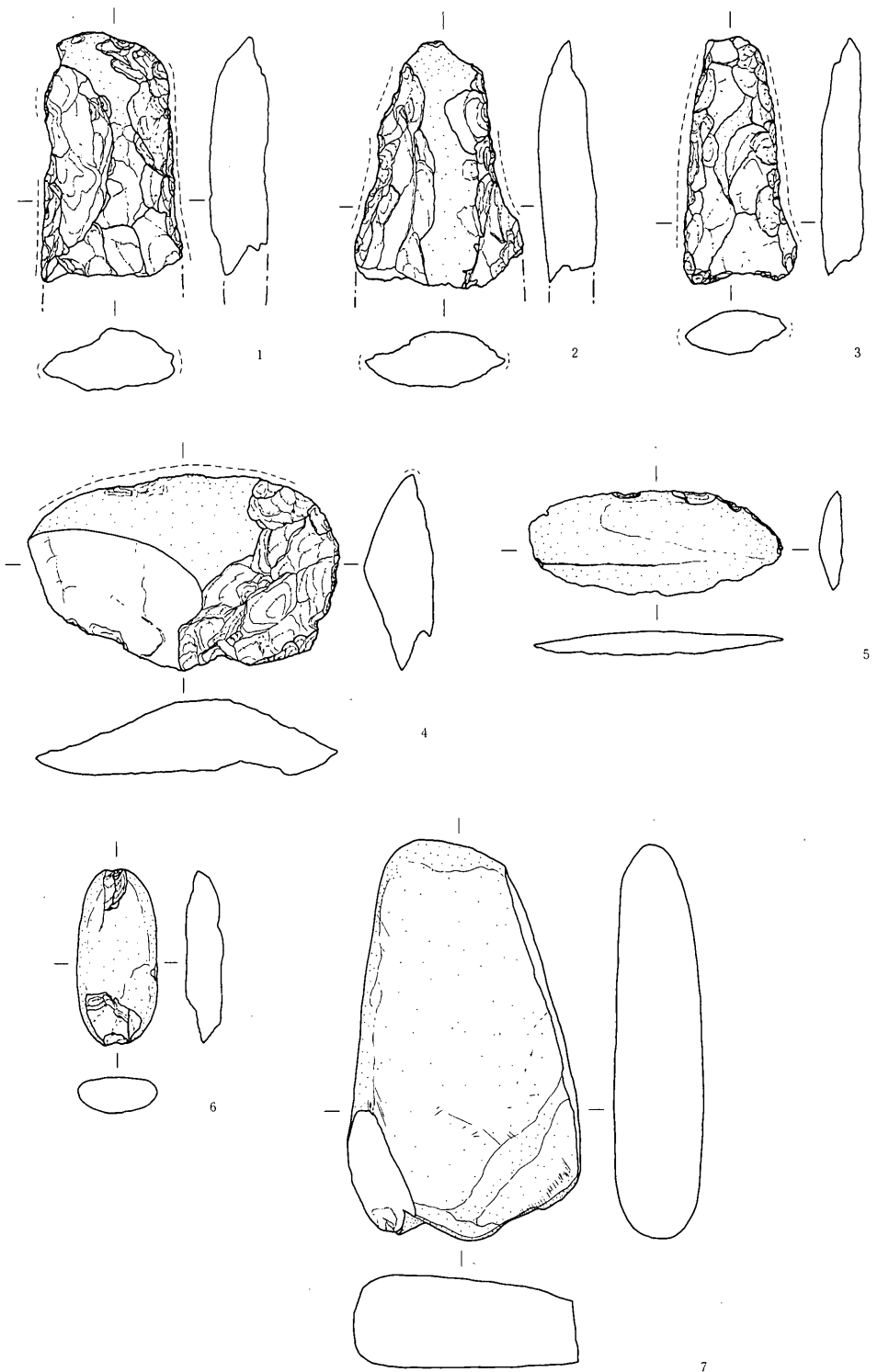
第2图 高岡4号古墳、TKO 土坑2出土土器



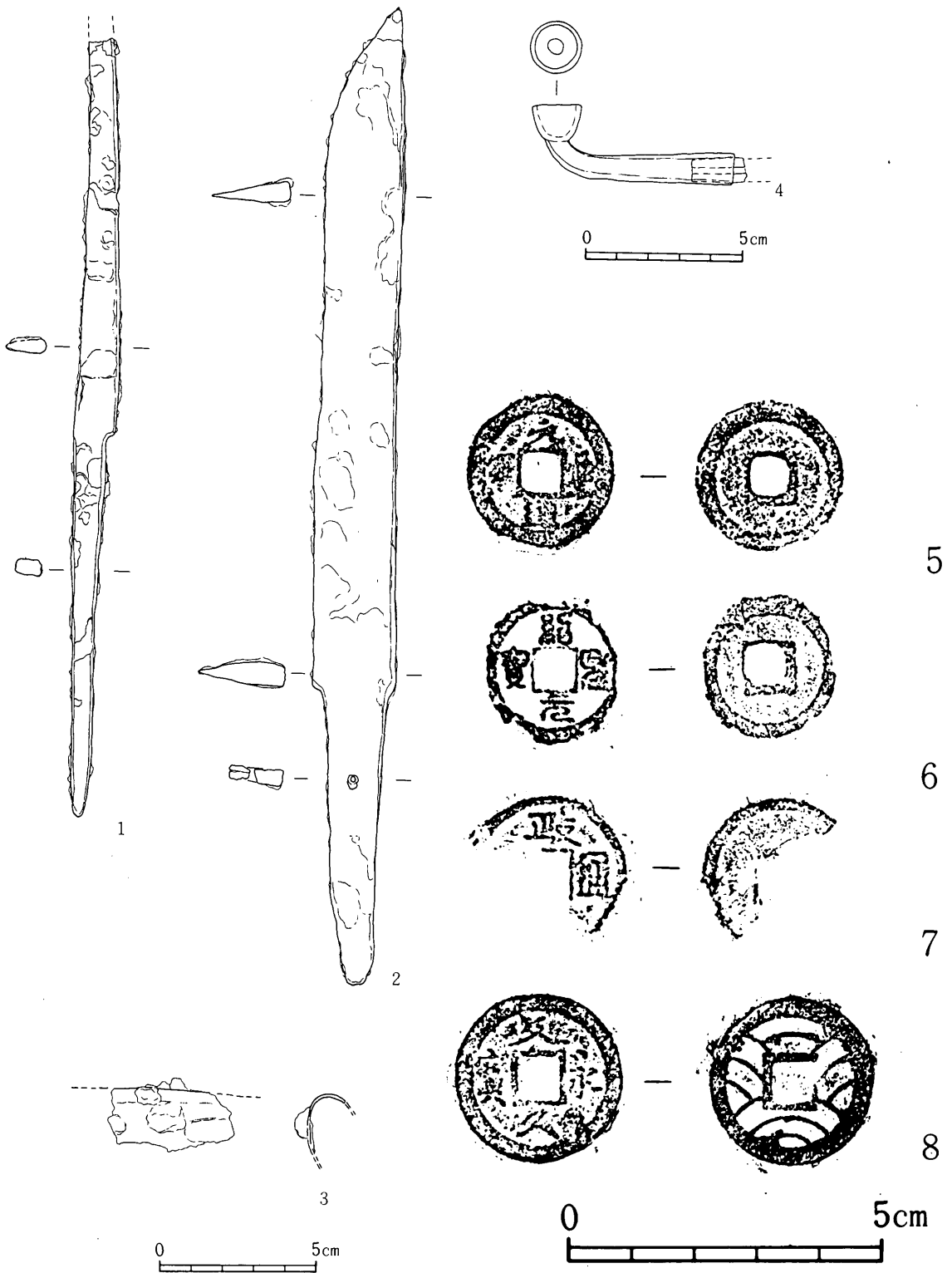
第3図 TKO 土坑2、遺構外出土土器・石器



第4図 TKO 遺構外出土石器



第5図 TKO 遺構外出土石器



第6図 高岡3古墳、TKO 土坑2・6、遺構外出土鉄製品

写真図版

図版 1



調査地調査前 東から



同 南から



高岡 3 号古墳 東から



同 北から

図版 3

高岡 3 号古墳葺石
検出状態



同
北側上部

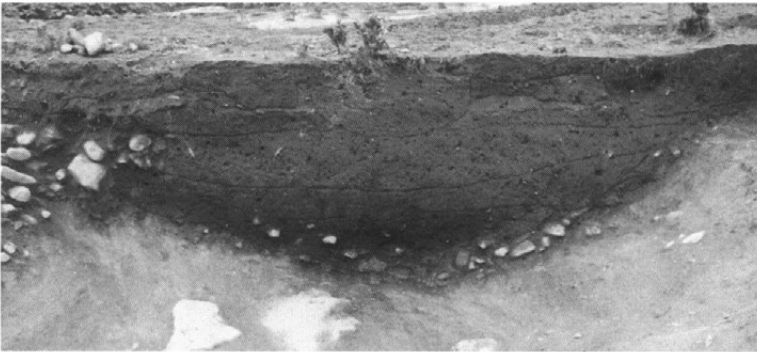


同
北側下部

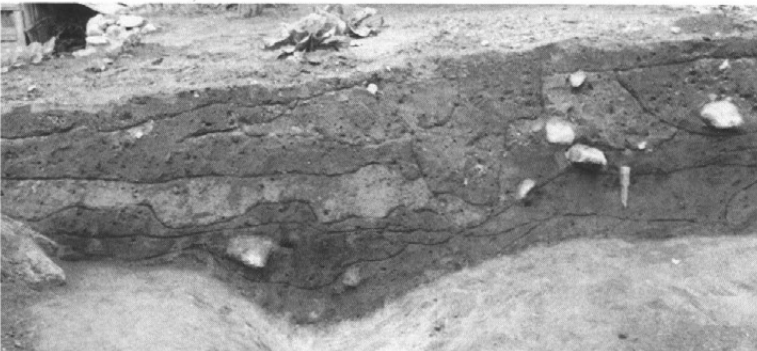




高岡 3 号古墳
北側周溝外壁石
出土状態



同
北側周溝土層断面



同
南側周溝土層断面



同
周溝内出土刀子

図版 5



高岡 4 号古墳南東から



同 東から



高岡 4 号古墳葺石



同上

图版 7



沟址2·3、土坑11



沟址4、土坑6·7·8·9



土坑 2



同
遺物出土状態



同
須恵器甕出土状態

图版9

土坑 2
須惠器蓋、
坏出土狀態



同上

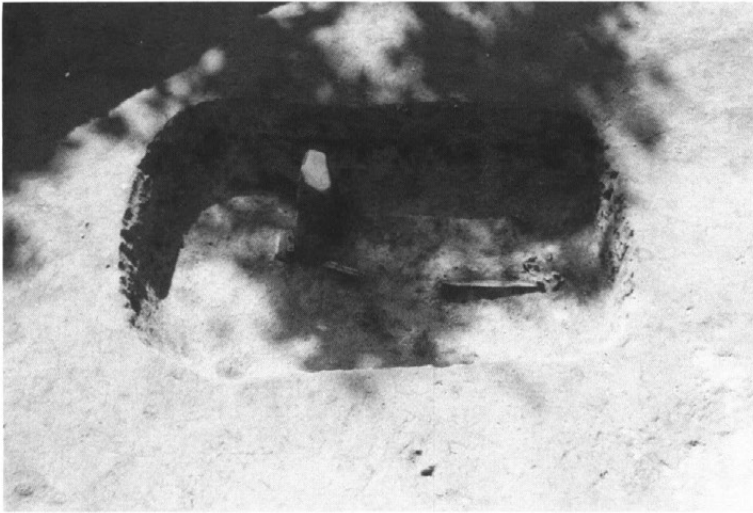


同
須惠器、
平瓶出土狀態

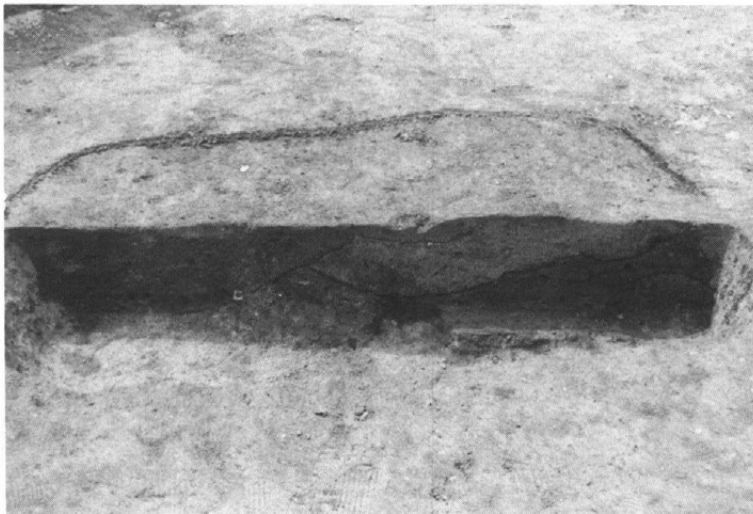




土坑 6



同
遺物出土狀態



同
土層断面



土坑 4



土坑 7



土坑 8



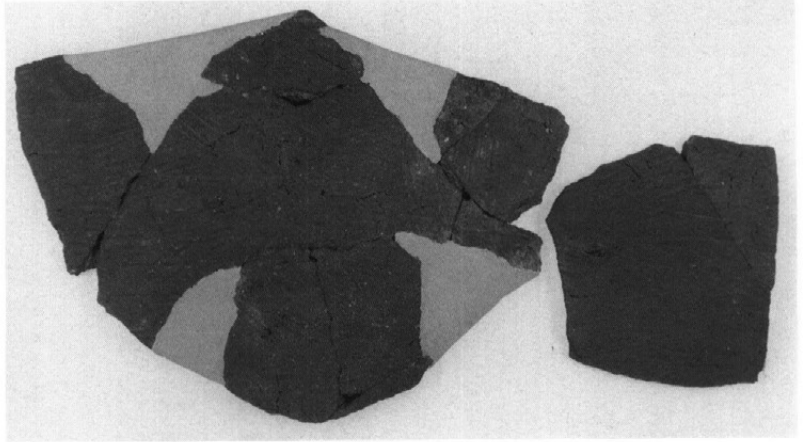
A区北側全景



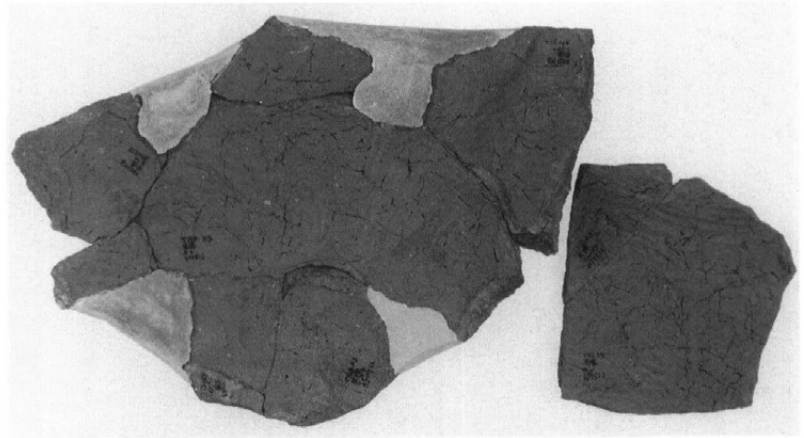
A区南側トレンチ
調査部分

図版13

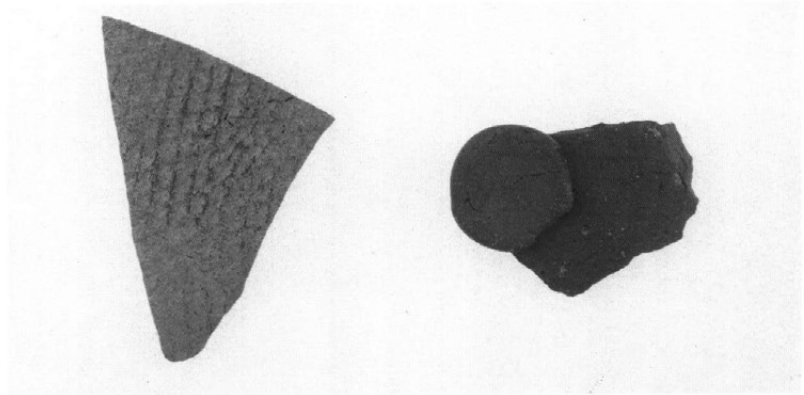
高岡3号古墳周溝
出土須恵器甕



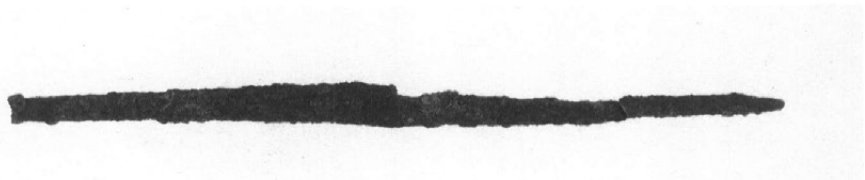
同上 裏面

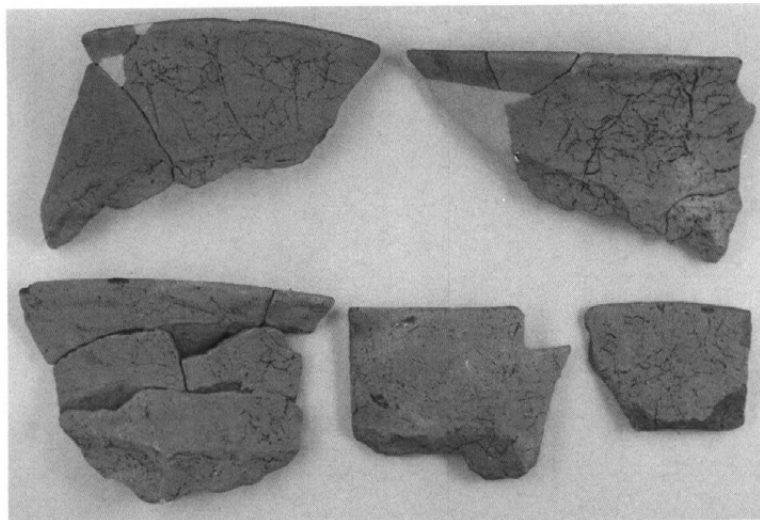


同 須恵器甕・蓋

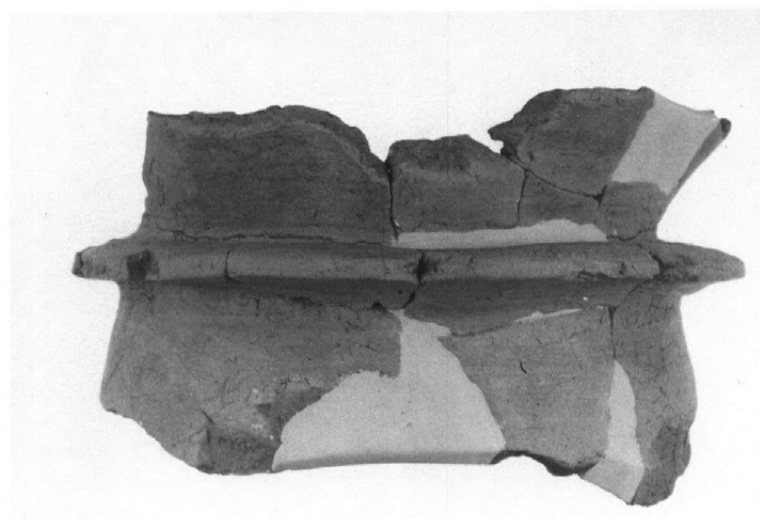


同
刀子

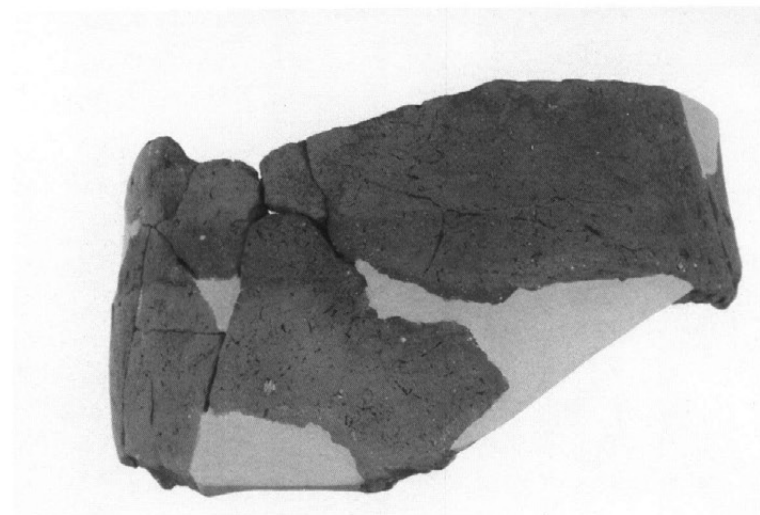




高岡4号古墳周溝
出土埴輪

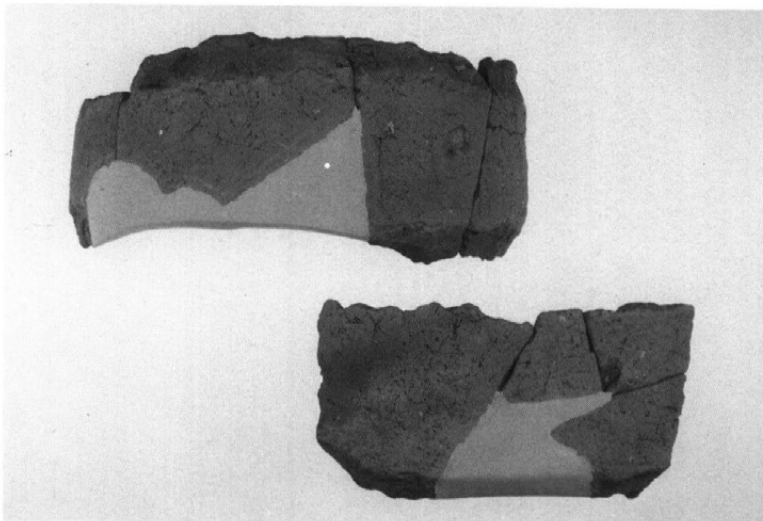


同上

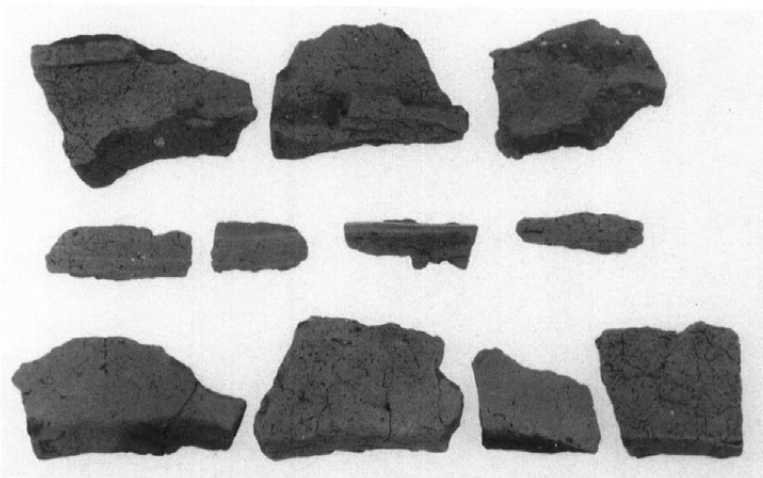


同上

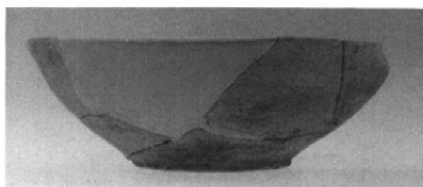
高岡4号古墳周溝
出土埴輪



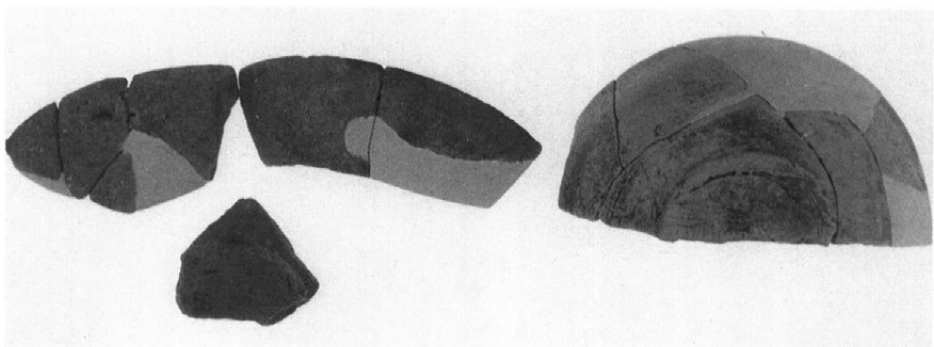
同上



同
土師器坏

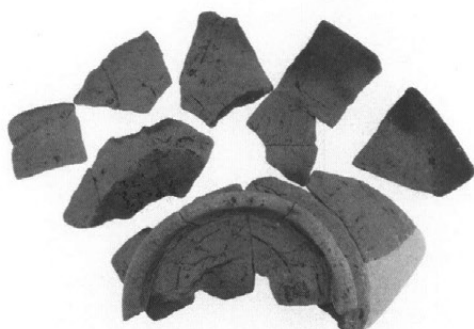


同上





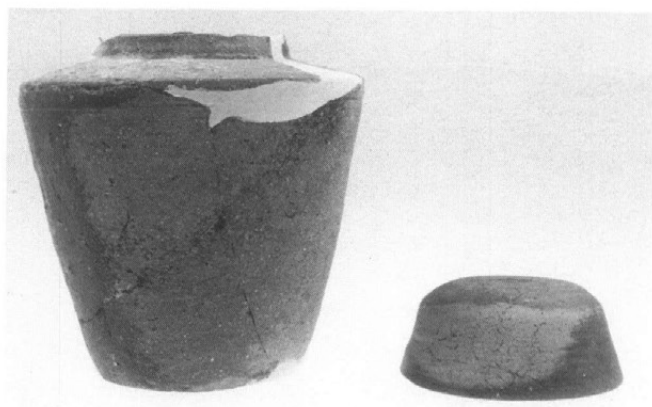
土坑2出土土師器杯



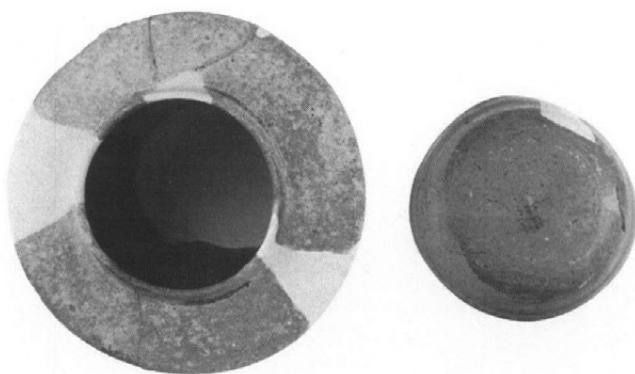
土坑2出土土師器杯（底部から）



同 須恵器甕・蓋

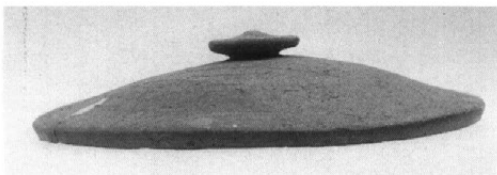


同 須恵器甕・蓋

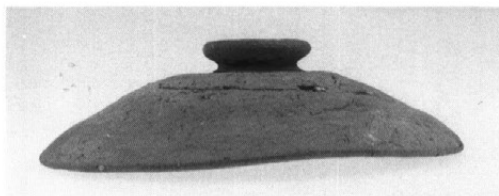


同上

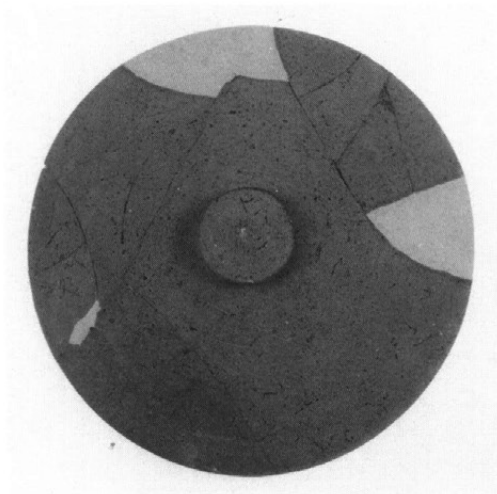
図版17



土坑 2 出土須恵器蓋



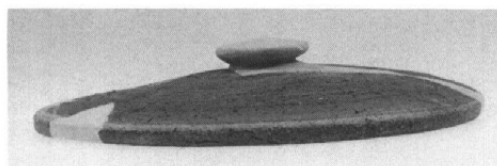
土坑 2 出土須恵器蓋



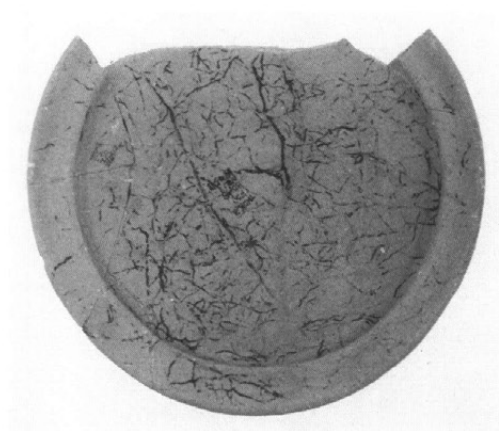
同上 外面



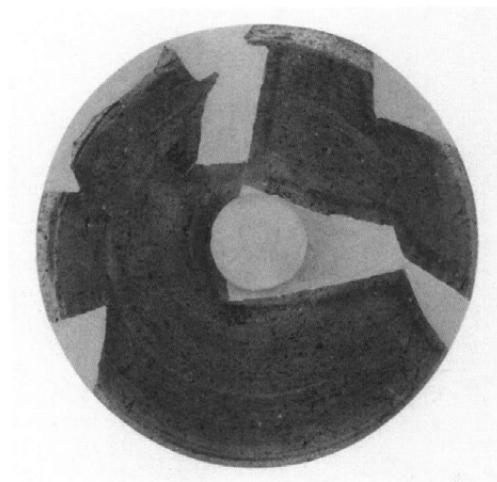
同上 外面



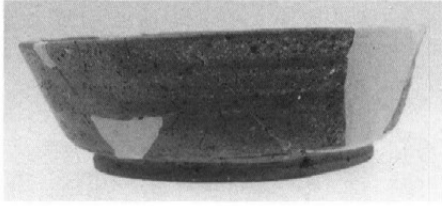
同 蓋



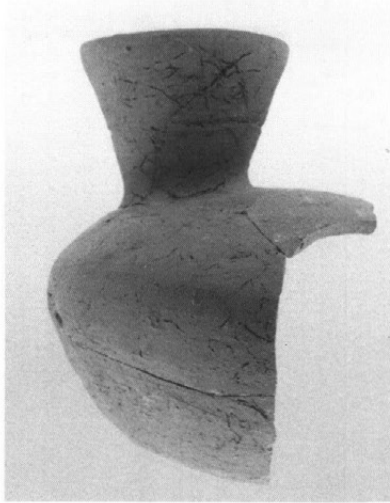
同上 内面



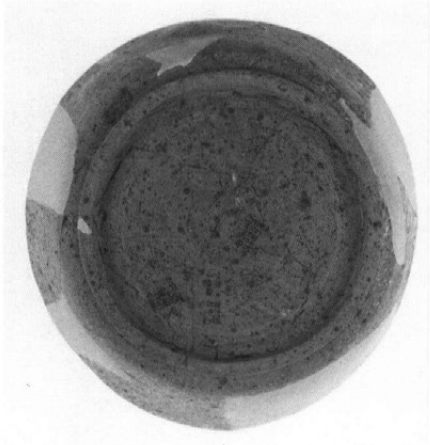
同上 外面



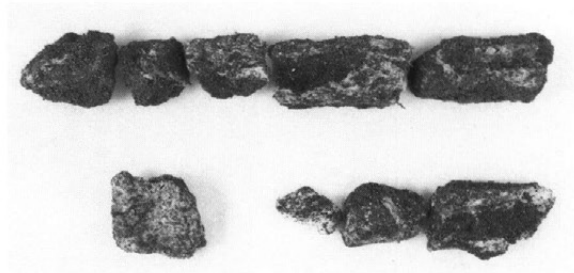
土坑 2 出土須恵器杯



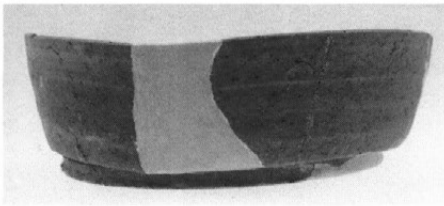
土坑 2 出土須恵器平瓶



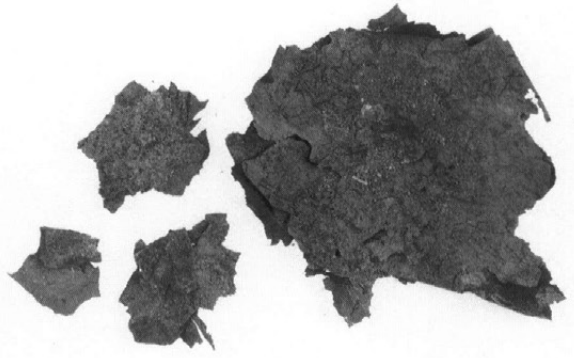
同上 底部



土坑 6 出土骨



同 杯



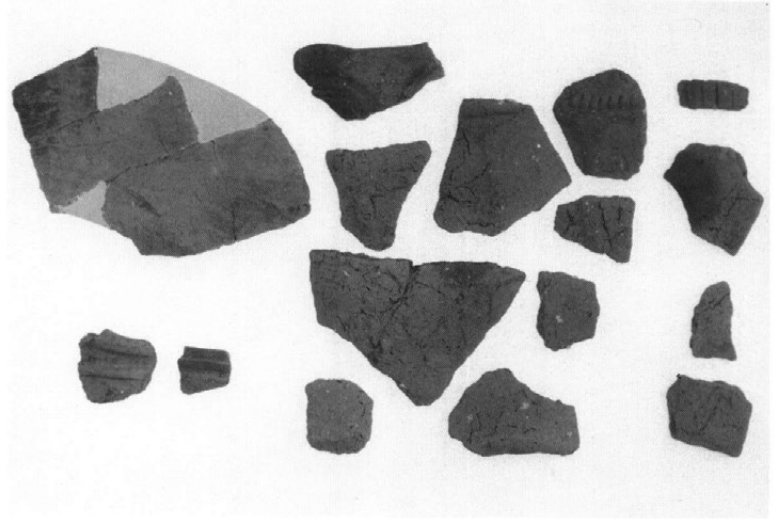
同 漆質



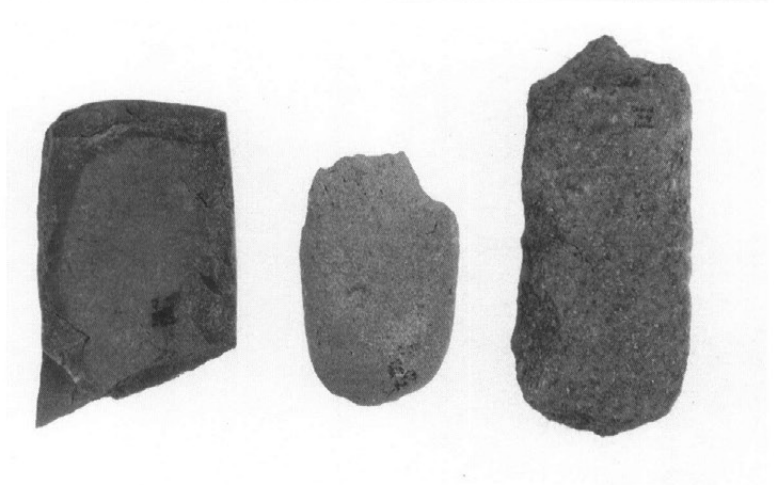
同上 底部



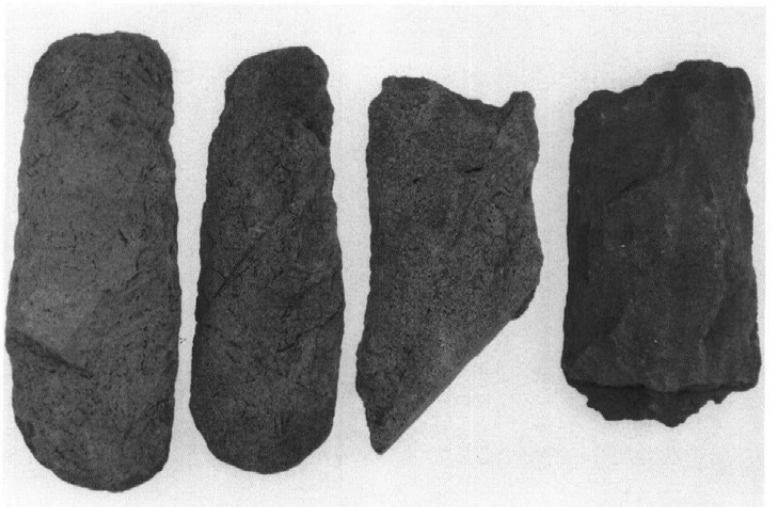
同 小刀



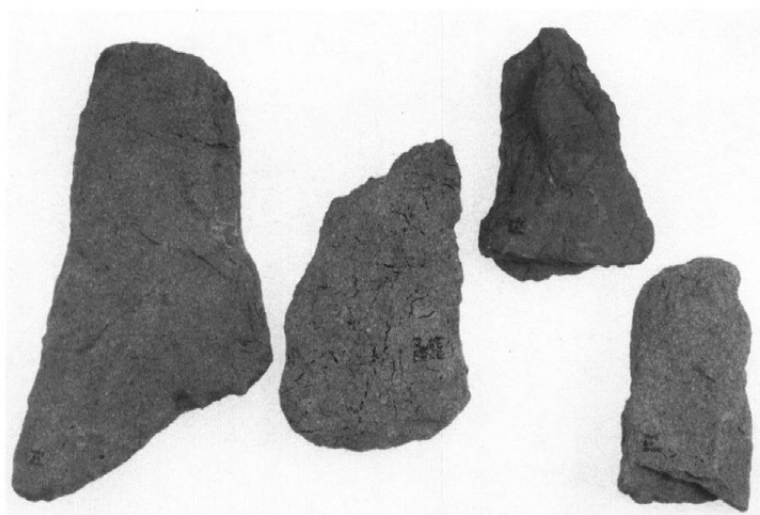
遺構外出土縄文土器



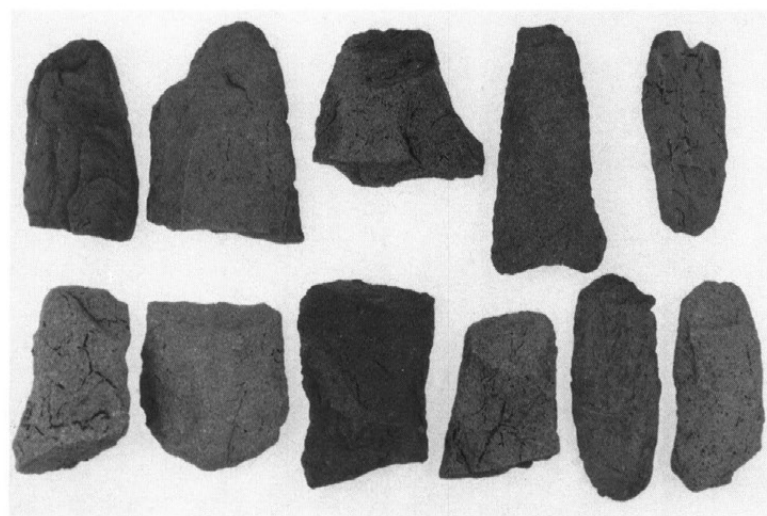
同 石器



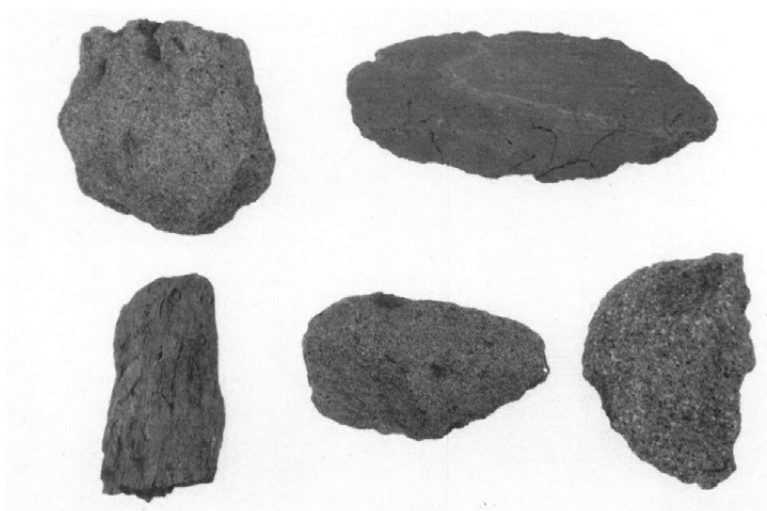
同上



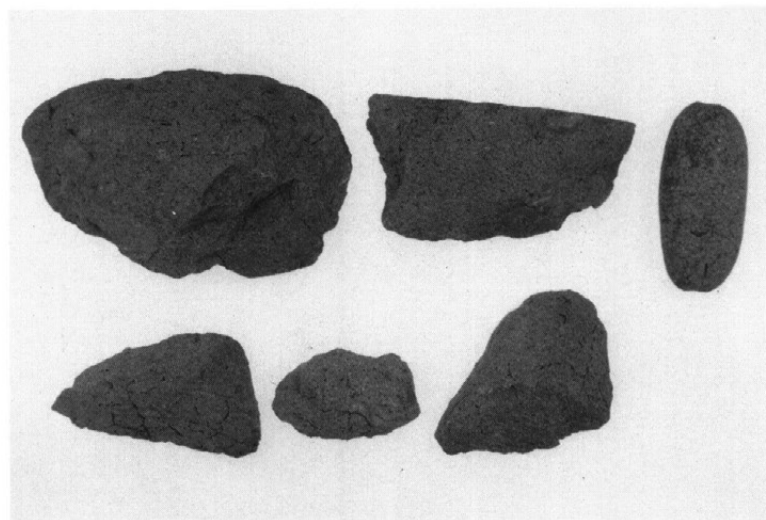
遺構外出土石器



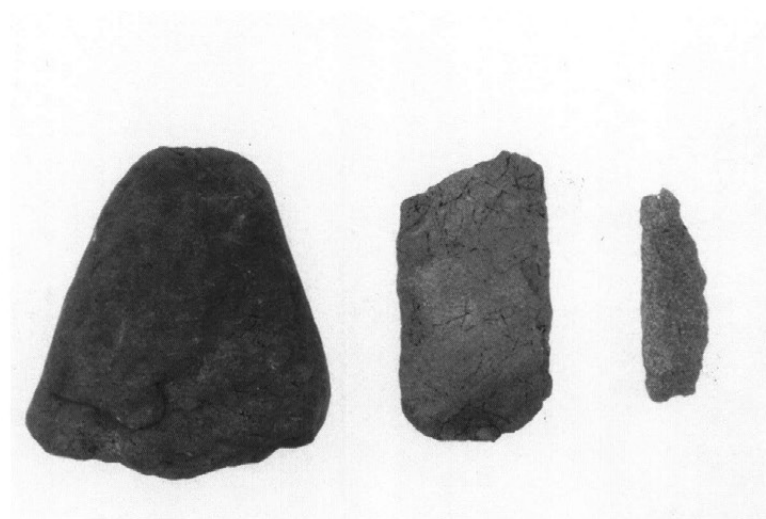
同上



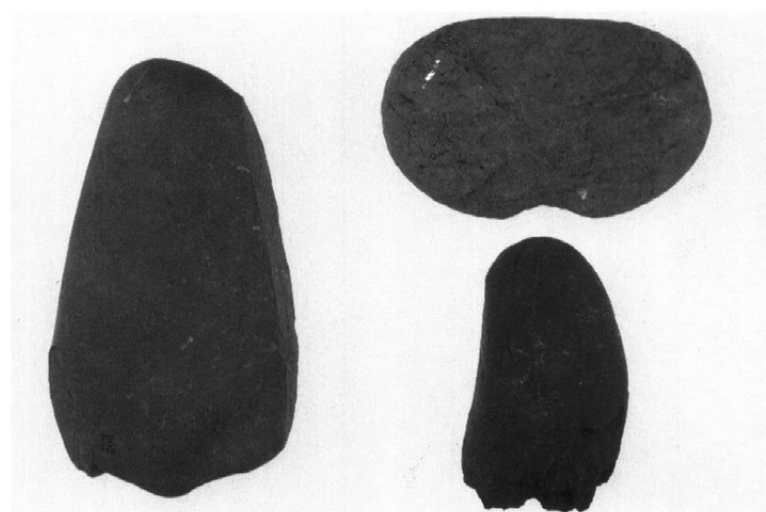
同上



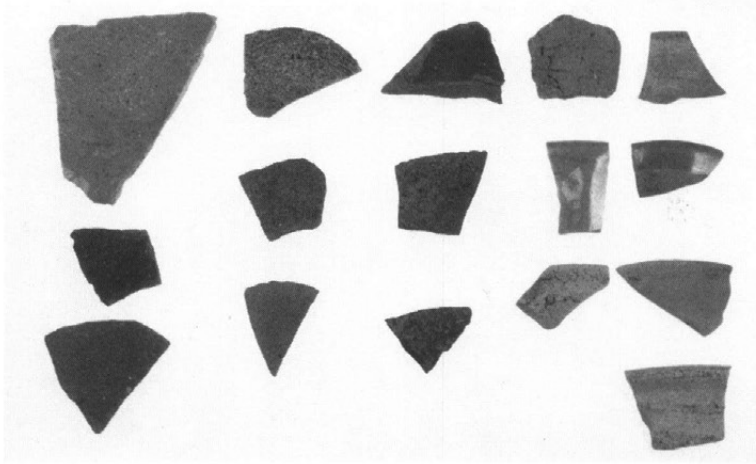
遺構外出土石器



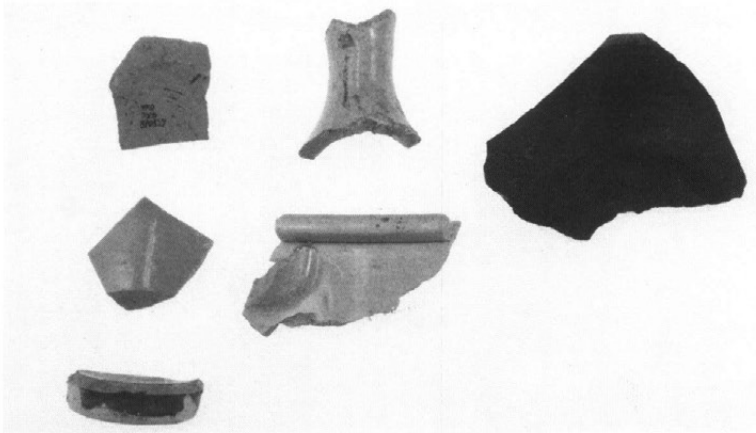
同上



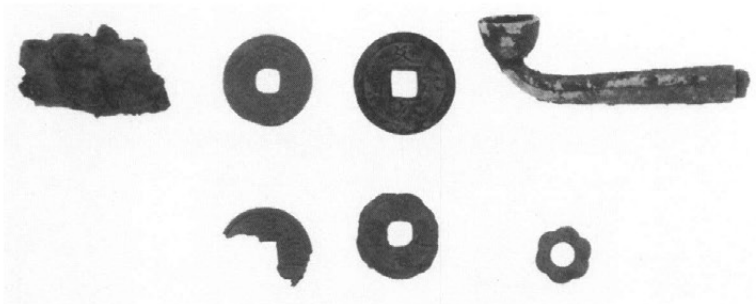
同上



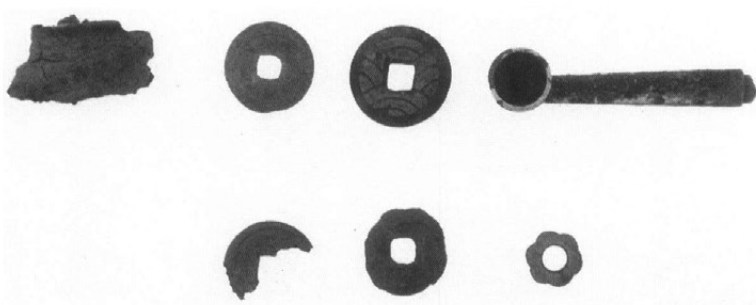
遺構外出土須恵器・磁器・常骨



同 磁器・陶器



同 鉄製品・銭・煙管・飾金具



同上



重機による表土剥ぎ



遺構検出作業



遺構掘下げ作業



遺構掘下げ作業



清掃作業



測量作業

高岡遺跡

高岡3・4号古墳

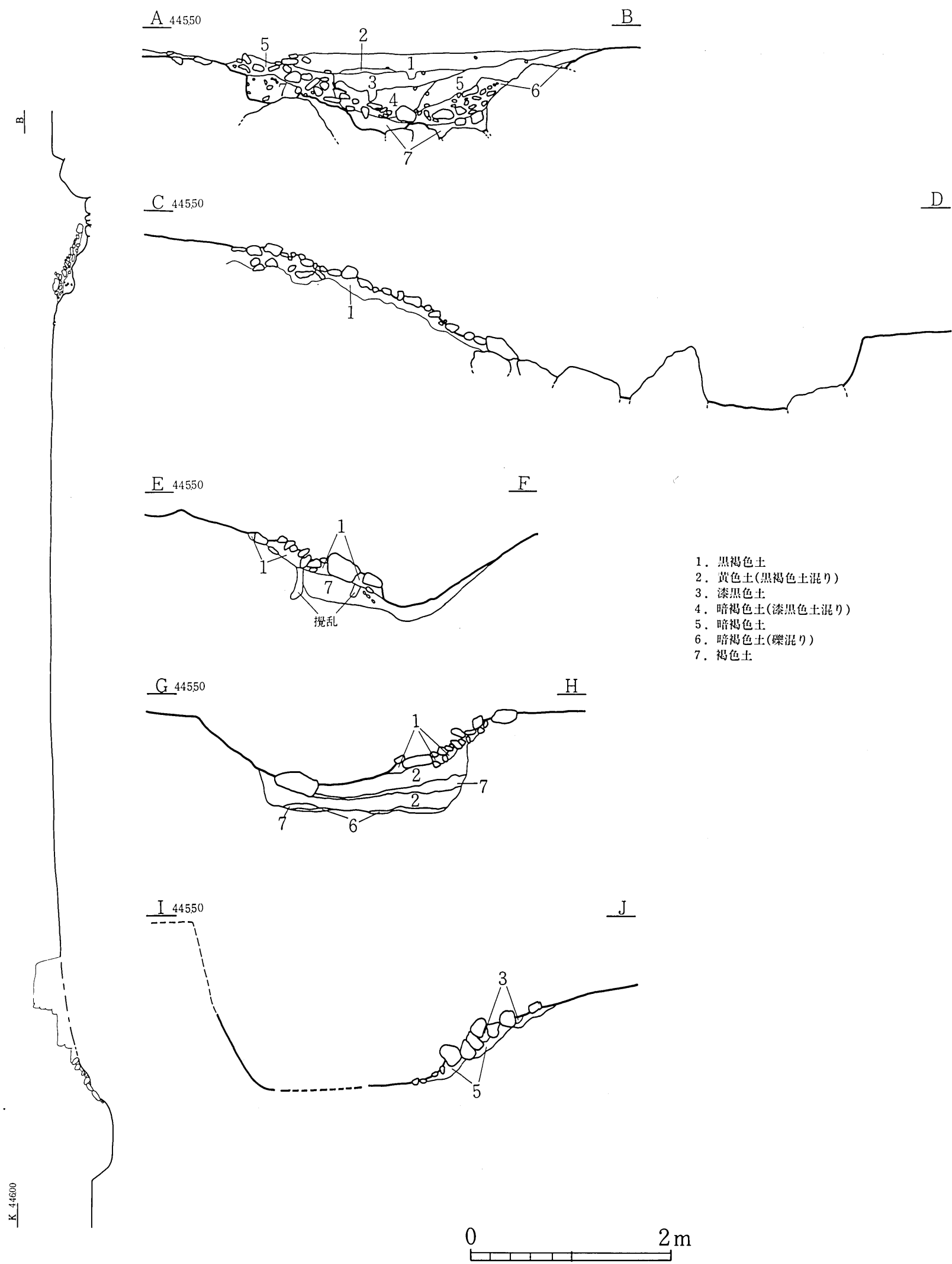
飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

平成2年3月31日発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印刷 飯田共同印刷株式会社



付图1 高岡4号古墳



- 1. 黒褐色土
- 2. 黄色土(黒褐色土混り)
- 3. 漆黒色土
- 4. 暗褐色土(漆黒色土混り)
- 5. 暗褐色土
- 6. 暗褐色土(礫混り)
- 7. 褐色土

